[illegible]

門外不出
慧
三縁山
慧照院
常住物

和書門 類
二五〇九七 號
九六 函
一六 架
一〇 冊

内閣文庫
和書 類
二五〇九七 號
一〇 冊
二〇二 函
八 架

内閣文庫		
番號	和	25097
冊數	10 (4)	
函號	202	178

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

塵塩草巻第六目録

縁山 慈照院 常住物

城一　宮二　殿三　楼四付臺　家五　屋六
棟七　庵八　軒九　窓十　隙十一　扉十二
戸十三　門十四　簾十五　床十六　沛座十七　寝所十八
柱十九　蔵廿　障子廿一　格子廿二　壁廿三　垣廿四
堂廿五　寺廿六　郷廿七　村廿八　園廿九　庭卅
縁卅一

藻塩草巻第六

居所部

○都　一　付名所

久かたの城　花の―　かすみ―　都の―　あまの―

みやこ―　玉の―　雲の―　月の―　月のみやことハみやこ　おほくしむ又月をもいふ

あおし　―の都と　ぬ産や　―色　―のてあまり　みやこのて都と　いひて見やこの

みやこひとといふすへの中の人をあまたの田畠をいてあまり上らうを弓矢をかたに

ちかたをあつひてかりすかかりをあつりあつすれハ都の人ハうれす

となくうちぬまそてあつひあかりくとりつけへしとて○霞ろくしまの

山のうをさくしつてぬ里をしてかとりそわつらふをハ代奉人の身振る副の

てふ里みよせらきさりきも　こそ身をうちふ里そてあつくむうるのちか

むけともいふ流をあり見て用とこくみ見やてあうふ里といふすハ見やてを

見やちや志里ぬ里をそ志里かふりそ　見やこのすやこやしと

あつくいてふ里月後やしとく　―海志まへ　なくてもなりなまさあ

ちむこやこ　あくれのさ孫　玉こしれたかれ―　たまへ

なくしし　藤原乃―　大和藤原のあつき都を

済の―　竹の―　伊勢斎宮霞石志めのうち　なりこさとりちとせ

古荻　つれく―　國乃―　山城と済くりとよあり河淡大宮人樒の栄

奈良―　大和さくしむぬちうのまね栄つりのつのひあまの白やいはる

八重桜くろ気をそてつくれ河音又あとによりすなりの都といふすハ

むかし京大ちの倭歌楢木をうふ金碧仙人所のとくとりあつるのやこし

ひそりあをふよしとん楢木抜あをくたをやりおほうくしきへやまやりうし

うたる後やみこいふ磁やとらく仍ま磁ふきさすとて号あをとまりとん訓や

とらくみこいふあをおうしとん芳から坂まあをさむ乃をうけそくろれとし

まて統りくまよつりひろるおよりのまりるやされもりをまありともこり又

い震且の三皇の中ホ皇帝の位をはめそてまつ河とそて丹青画おもへし詞

と我朝神武帝初より代来寧楽七代都已代とまあ洛おるる准例して丹青と

りくし和語まりそかハさるゆへま丹青奈良といふやとらく又あをおよしあ

らのこやしとりて孫さあをおよしし孫　郡波―　つの国あひきあまのよ

ちとつりも済くけうりもこれ玉柳芳芽　ひしまつさかむひろふ

宇治―　山城とむうりふ見やとまつ―麻　いわ井の―　伊勢江霊宮くまてすゆ　布留―　大和

宮所附名所ハ都のみやこと云あり　明日香ー　大和あすかのみや　きよみやことより風
又いろ〳〵のことつけたり
ありけれやまより　難波のみやこー　を江　志賀ー　近江さし　ら月摂哀
よりしたをやめ
佐良ー　を江家て　りをを荒　新京　新都や遷る楽に都京すさらのきよら都く　りつりすゆゑも朱雀門之

○宮　二　付名所皇居之

はしたー　めしー　宮之ー　みかのー　はりのー　きさのー　さい宮之又　母院をも
かくー　母宮之又　名所ろく　とこしー　春宮や　あさー　夕ー　かきー　と
つーところ　○月も日もあらたまりにけさにあらひむろれ山のく　つ宮所礪津宮所と云ハ春宮やをも字之事
ハ帯のみやところといひさにみるを久経之万にそつねつきうとも云り　○よそにみしー御ころの思も君と世て書都御門と省てきうるも是同じ
志賀の浦のー　かしはらのー　あまちりしのー　ふく　是い
木のまのー　是ハ神社にありむかし神社ハ海にうかみやあさくのさ　此瑞おかりてまのなの月やまにや今をあり觀音是之

あまー宮は泊瀬や若のまへも先木のそ数をすく　又あさ小舟神
瀬に付之と云位あまハ二十壹の社社のみやのうちを入へし　ー柾　ー
人ー　居ー　ちー　のうち　大ー　禁中也　いはくれー　指名き
られるの名に坂ふー　ーかへつて　ねーれはと行
のみや海のみありうを寄て　伊勢神社之　ーとよりさを
壱浦ー　長門○はくえとそよらの宮につきて　ろめて代々をへめれと水ハもらはを　をしてる　難波摂也　万にみ
ちのうくをしてれ　とをさしのー　大和あすか線さり線　ハゆめのうきり
こやまさあしめをも
ー　大和万代　おすさむ　櫨原ー　貝○りしりしのうねひのみやに　摂ー　山城月の
やもなりさうつ　吉野ー　やまともをとみる道乃芝茅摘みてしめ子う袖　ろうの尺
海さの摂宮院之　あら宮神のきハ花のさへゆかに河清尺えし
の山　高円ー　月みやくのそてつき哀秋萩あさちるき寄より　茉垣ー　河
峡　まとの尾上れ尺やしもよあり月卯花
渚ー　うくの是ハ法院といへ　高津ー　摂州月摂附名寄松風君　珠琳ー　陶
へともスやせみや　あやまとし鴻子お宝出

やまと日よ見らく櫻な色の光池まき　うめぢの一　やまと但未定月
そくのたなきさせらく　さり高五十鈴河　となりめて
那波一　攝州あやをとらめらかのれつ舟　長柄一　攝州　野一　山城
なれ肉を和よあつまり里よ同　掛枝　やくの
うゐつ菊しくおく月影花を　ほくさの一　山城秋芝長月但　くもまし
まみつ琴みね松風業のき　山宮え神宮く
乃一　やまと〇くもらし一あまきらの鏡かけ　山科一　山城　不替一
ろみはくすゐのとやの色のよの月　芝木
山城河ちうえ流をとそ清きる鳴と　秋津一　やまとをうしのく秋　あち
ふうえ庫なみりすし里見やりしら　つの尺やえ作まうし
まうの一　つの国さくしあちよ　近江一　大津宮や霞見　清見
原一　やまとあめ乃ささ　の宮の清食向とりくり　やまとらりす
志済しめと　ころのまれよしみく一　攝州神さ
ひらけさる浦れ松風作　かしこ乃一　山志ろ來玉　大津一　ひてよれ
代よりをもらぬ新月　逢戸と宮　あふ波
激一　河内もくりも　鴻一　逢戸ととまりのいけれ淡千さるさくして防王　見
氣孫り流く三　うひのみつの万代放る水月又榜池宮其〇た
ちもかの志まのとやまをあしされ　あすられ一　八雲清琉風　奈良
りさたの思へよとのひしてゆく　をれとやめ

一ころめろこと　つし井乃一　見をつくし大香推之全以和八拡と　志
那よ同　ふめろまも不入くとさく八雲清琉
清られ一　大津の宮同之　高天一　大和　畝火櫨原一　やまとし　葛城
當　神武宮
高思一　同綏靖　行堀浮一　同安寧　狸曲湊一　同懿德　掖上池
むし一　同孝昭　室秋津鴻一　同孝安　黒田廬戸一　同孝霊　狸境
原一　同孝元　春日率河一　同開化　儀城瑞籬一　同崇神　巻向
珠城一　同垂仁　巻向日代一　同景行　礒香高穴穗一　近江歌　勢
穴戸豊浦一　仲哀推古大和　磐余稚櫻一　大和作功履中　狸鴻豊明一　同反正
那津高津一　攝州　丹比柴籬一　河内反正　遠明日香一　大和允恭
石上穴穂一　同安康　泊瀬朝倉一　同雄畧　磐余甕栗一　同
近明日香八釣一　同顕宗　石上廣高一　同仁賢　泊瀬列城一

同武烈 磐余玉穂ー 同継体 勾金橋ー 同安閑 檜隈廬入野 同
ー 同宣化 磯城嶋金刺ー 同欽明又しきしまの宮とも 磐余譯語田ー 敏
達 磐余池邊列槻ー 同用明 倉橋ー 同崇峻 小墾田ー 同推古皇
極天皇时 岡本ー 飛鳥や 難波長柄豊崎ー 孝徳 大津ー 近江
之遷都 舒明 上津
宍より 遷天智 飛鳥浄御原ー 大和 文武 藤原ー 大和 持ー 文武元明 平城ー 元明自 奈良遷
聖武 孝謙 諾楽ー 大和 元正 長岡ー 桓武遷 司穂ー 大和 入野ー 大和○ ひれく
戸の入野の宮のさゆら日ハ 大和みえむらよ 粟津野ー 江を
海ほとりまて 約ある ことす 末遊ー 近食向之
天智天皇の まーますや 巻向ー やまとのみるの檜

○殿　三

きのまろ殿 飛鳥のまろやそ 智天皇此時玉所之 海ー りうりあう 先人をして 飛鳥

ー りんしよ いつくハ 此 あめー 条院やと万寿ある之 ゆくてー ゆ不之ことと 御も同也 殿ー
いつれー ほそー とうく 廊やみ廂のう 草ー ○薮の臺よあさめ置て志流を 流も茅殿 かりそうー
あー 禁中 ゆりーを 同ひろしなしい色つ之 神楽 さ
慈德 中ーや
りーはけゆをあちえろむまうとめ とよ色流い
清遊といるつ王 竃殿之 その 神楽や 此ーの西れくうかた
天ー 一流遊殿や泉 殿とも いつり 人ー 柏梁殿と各の 在あるへきて不之 うちもしやるー

○樓　四　付臺

たりとの 日本記 ろりれう色 荒れ臺 玉れうそあ

雲のうそあ 露れ臺

○家　五　付宥之外医術れ仪

しきしまの家　さきくさ　一説家の名とらく万葉にさきくさの中
よをはんといふハ福るゝ揃きく家之
三葉四葉目出度やさきくさを三枝之神の名とも
云拵家ともいふ但一説家の名とらく
里へれやしをハせとくいひ伝まそろし　世と同五言也
とうく祝て為るすや又云家の門よりかりをいふ
そことも　家れかりやみくひ志
アえへとを云又云志
のゆかり　古つれ　うらあく人
むつ　家之　いとうの色　いゆりいるゝ　まとてく
あやしきい色れりさをはうをとくそのやうすてひさしろ之又云と
尺りこすしく共云り只おすしすゝあしてくむとくひと同するや
あの清りなけこ　○あしのたとしもこ山よすむたこもりく色うち
ろうとふのつりるすこ清りなくこそてまらをあこて志
くやまらくこあしさねこうさてこ云や　さきた　そこさしとハうろゝうま
此二ケ條以上の真さる事あしくま位や　ろ板ゝそてあさゝる家
やとらく義　なつのかさ色るゝのりの家とらひやたしうふ
三ふあり　いもくかの家やも伐畧して云之　しう
かりしふ清さうろ　宿いへのす　やゝ　らも云りや　や　寄
まきのむくつのやと　あの家　かまてまむやと

山家　山さとし云や　しのりせ　家ゐ　あらへし　やゝもりあさつまの
たりのひのう入　あま海清り宿れ板さ　あまもて
くさもちのつまをなけるやと　家居　庭とつまとふ　りまさ
の庭とうま　あさちふのやと　あつ口の　ひあり　あしてくむ
あくてのく共云くせハいかりなとあくうゐくこあもせさろる共こゝり人りさ
とあしくこころせらや只日伐く　袖中の説するも山かつのいやしさやとの
めくりよりくさをしてころくこすしうろかり
ハ尺まそしろれりさをおめくろをとこやと云し　庭ともも　努しれまま
かるさおれし　ちまりの　よるもきの　しゝ　冬あのこれ
し　あさ家の所之　ひわさとともよめつま　是家うりさまさ庭又邦ろとま
のたりまちう云りくよまう云もの風そ清むけさ　いくりの冬こさそてもあ孫こうの国
ひさ物のちつきちやうのうさいうち古と詞　松のいさ　わか
色しんをととりちやうをたまさる　よいへんも我家や
帳をられさうこ侶

る楽のこ家ところけれる家たちあるれうらや
ぬるー やどのはきアー 宿雨 古家や いかうか 荒之風
いまましき めくるのこそもん やどのあふたも
まうれ志き かくれか うしのまもるり 又いつくすむ 那波人あし穴た
くやのまとくるれく やとれあけり 清井のすゝ
り あれさる家 万○こやころあれあれさる家にひとりねもふひよきさつてさひしまたへて 山かく
清音て一居するにも 万延志けるー ほくやかなる
ー 源氏ちい され家之 色ちあふの方 家之おれ 小寝 孫也 源氏

○屋 六

あれさや いやー云家をもいふ也又仙洞のすこうすんとともやや又ハ棟のみとをもいふ云まよりて仙洞へて云之或云只ちいさえ庭
ところ又あつ云座のひさしさしくりみにふ 海ー まやのあまりといふハさ門扶留あるを口戸おしといふ是やといふく やのあまされ之まやといふ宮殿方に於れあるをいふ又いふあさまとハ只於此手共云り又云門柱二あるをいふとぞ まろー 岡ー かやー
はくーかもーとさー あしー 松ー ぬるー させー
志まー いそー たひー あせー こー つの国あし つきー
たりのを 岡ー 亀ー しれー 孫ー ひきー しや 助浦之大内也留のあり門庭に穴
こしかや とさくつこまう こみ炬舎 ゑし のけむをとさ川まー 奈さく
しと一志ふー を海ー 小井ー かさー まろー 清り
ーしつのあせー 虫ー まくみしあのー 野ー ゑー
日本記死人ヲ取や あし穴たくー たふ もん あしのさろー あし
のこーや 西あり あれ 人を殺小屋之八云出説 まよふのかー そまつちまてぬひよる小屋

や又ふあやしの家のいくしゑなともなくて王法の孫かひし ○朔

ところかよ夜をさねかさをひこひてしゑとうさいふや 霞か

ひやか下ふたくうちつきのひたくありとつきんこもうそうひやと八尺火

むとうけるに哥蛙言やみふかひやか下と八の中よこうひもうよおやのうち

はつくりもる礼とつくるてられやふたるとあまさうさくられよてこと云

みうまをうひやといふもたるの下ふ見そをとりたれハ水たまるとして

ふちつたくる一定八おやすうてとうふるもありおかくハ孫すこよたられ

ておむと化とそ戸奥義ふかひやとへのかよ奥とるとてもうるや何もし八

江たとしよもといふ摘とよそてさりしてくちをとあきてきうちよさくのこゑされ

と法こゑをとりをこゑされもあさくさてもふつさるく道のあつされとところへ名

みと云ぬれもうくものおしろきそうそれんられうるふさうなやをつくりた

かひでこうりとそて人とすへてく名とせたもせ又るひ摘をうちまさてけうを

とうひつけなもれハ山やをうひやと云やいふふしつけと云摘をひきつ

くろへろたみへしと云りもうまとうしこと云ふ説うさとゑこ又ふ田や

ふ麻をうをしとそて人のうこのたちるよくれのくさ此物をとりあつめや

け八えうを得とひて志うのようこぬへこの火のはふみて翌朔まてのこうそ

うすこれいとくふみも陰を朔うすことふりそとめしまてすとしろく又六百歳

の後合判ふその朔うみすこれ言をひいて是ふの言の心八山田の唐に田をと

てれはまかの位やを離なしして山中ふ今君之弓蛙のへゑきてお君のたくさ

めとそうふお図の言や又うひやと云んもは廬の下うり火をくゆらうし煙

をおかしうらうしめて或令拂冗蚊ゑ八令を猪炷康や然 あてとうけ

志於千蚊康志佰至一匀ゑ代むて煙炎者二為一変矣云こ

おかりこの乃う色の松 ○ かちうし むのうそろうるも あし よせくく云

のひろし 元浦言 あしらし 辛之 なつのなかし 無雅とも

しや おも川の舟あくろ江とそてはくれくし ききふく

言ふや きとしハたちるとさうか たちふ

さ角ふ姉ろうや わひ人れうこそふかくるあよてを うさふ

いつ海し とかとハうのたへかさあくせすのえ ことしとうこ活へ心而とふやと云こ くさし 膚へぬうけく いわや

あまちのこしあしれしれし もろすこ 容含へと 云こ 志

うのちのしいうかの濱し三編此ちろしもくあ

くはしいさしひかの作くしそうれ悔せしもく

のまろしなこのとゆしとまのし のかし なくても あ海れ

かこしまれのかつらもあきのふせしのそのかをも
ーとさしー形も海ー形　棕のー形　ミつくさの
思のー形　いつしとあれともゐ　ゑめー形　抄とそむる　ゑくめー形　不や
○小萱かくゑめやうさの竹杖かしふりうぬハたの成りうし具志うしる
うらもとふうさ物左邑歎隆の方く私公若ちいされやうさ元杖一為
ゆくかし　○夕附日さもやゆへよゆくうやのうちとよし又志りぞ
まりくう夕附日ゆもや河へしとハ西風语夕陽朕河やうしら
とりしみも地形のたりしろ禾らし
じ志うも廉よあるもこしとハ之然や
あしの八重ふかこそや
雲の八重の本模れいさやー中ともなりアかあ
たもいうものー黒木ー　あめー　是ハ黒木作　源氏黒もむ志御とふ木
○みくら山まきのやたてくもむたくこも
年とつんとるくろしーとそたゆふ
又但只かれのつ夬まれれや
さらとふしらく
あつーのつきりかをもちれもふふのこし　志こや雅　含し源氏

中やゆ中君之源氏

○棟　七
○あれたそくむねをくもらる重りれいかう連すてそめぐ人をたけ
○あれをてくむ孫戸へうまう山ちとんち渋みみち系と床ふしそをけ

○庵　八　いほりのいほ

しつり柴いほり　志ゆう志きもいほり　草のー草
のいほ　君のー　いほりまい山かけのー　同　みなれー　同　杖
のトー嵐れーかうまかりー　笠とめうえたし是ハ高低ーいハ刈
稚の伊湖ーもうりいほの奄く文
うりいほの奄といの字を
そへてもふうともとり
　雲色のいほりまれとすとあくこ
棕れかうまかみくさかうまふ気ゆをいかりま　やをも
うまいかれ杖をしらゆーしゆまを　孫やきりのー

伊勢物語に 繁糸乃ー 同よりかけよみあり まつのー 同 千とせのー 同

かくれー 同 花のー 同 露乃ー 同 のきのー 同 ちとせ

同 組織もいふと 文字なくても よ夜のー 同 いかなるをとめのはき

しー さゝかにひ乃糸にあろ 雪乃下

ー 松乃下ー 若乃糸ー のきにゆふー 藤

なきぞとの里ー にはく里 たりそめのー ーの

さらりかくやる まくのいは ーあるまなり そ

天の原をめぐるー なみとおけるー うつの山うちえ 流人 ○ 其のい ほとえくはいやーきえなれとも

よよこつのー ね成くり ○ 志きのいおりむのすそれをうけきーやを

うたつひのおをとぢよとて

○ 軒 九

軒れ志は ー乃玉ー の玉水 ー の糸水 ー丸い

あやめー のあやめ ーもー の松風 ーもの松 ーもし乃

梅ー をたつぬる うやりーも ひさし 是をさし わの

さしつちくるえとはひさしを雨ひさしなとゝいくつかかくし 是をおさし

つちくるまへいさしうをみつしとはひさしをさひさ志たとへとくうり

ゐめよき志つけるうりさとなりたるへし 又いくひさしーとちいくつかやとゑ

又皇后孫ひさしーといふはひろののうへ よなくひてさうとい

かはくつまのさ めくる軒 うるやのはさ おいつまきつ まもののきや

のきのひきさ 玉南乃ーたまてかる よしある

しつのすまりかなはされをみちをとしうきく

勢て

○ 窓 十

窓あーふ羽をてらーして 月をさし入せたり 蓬えー霞のーー
ーふりの気 六すひのー すきのー ーくーきー ーの
むかりのめ ーーの雨 ーえ燈 ーをーあくまむろの
ー 六窓之漢 月さ労を投るさぬ ーーの夕風 家くとは
そめまーあけて ーよくく ーよの西よ月をみる
ーとふあーのー ーうつ桃え遊の松かせー
とちて ー古よかよる ーの中

○隣 十一

四の隣 ○伊へよそれ四のとなりのうきこーふうたてとは とよくうーぬうふ松云詩よ緑樹重陰蓋四隣といへり ーの
松ーの気 の手くとなーへくすむ 是隣となるは まぜて同じく 春え

ー 是時節之去ふ ちろきとさく ーとうつをー ーとのふ家 ○あまりくらひ とうわとさへ
てらしへ乃うくのおやこうのくこうおーうとうわとうゆかるを漢孟母三遷とまり孟子うためふ母三度とうわをとうつをとくよ気とうわるうつした
むやや○とうりぬぬちくのかり至ふあり す数へ扉あきれなうものうそまくる ちうつと東毫 指意羽 ー色
往ふあせのほそ道 ○さし人の此きさとるくろそよむ音もいつくまそとそとふるわうわけき

つ扉 十二

紫え扉 松乃ー あーーのー ーくー 葉乃ー 倉
のー夕のやの方ゆくむ家ー気ー ー杣ゆる 里
おくき 樞とうく当ふ是をと個ろくもちり又くろくとゆそともちぬあり 又ろうくをあくろくとも云り

○戸 十三

湍戸 石ー あ痛え岩ー 櫻ー さくらあうそつろりらうと之又云さくらの若木をとうるをてうき

ともまりして戸一あきくる 海ー いさりー ねやのむろーー 村
とおりみ山さくら戸を
ー 妻戸のあけてひてあきくあくるを云之 あきー 志きのあみー 行乃あきー
志きのー まきのー 松乃ー 葉のー し 芝のとさ 源氏 関乃ー
朝ー 世多ー ーロ よる乃ー よーー よそのすゑなとゝいり いもー
ひー 欠もみ紀れー くろーー 禁中 禁中 行れー 法ーー いも
れーあしー多れ くさ戸ー ゆくのー ちゃう人やま
ー 稲やの風ー いさや乃まくー こやれー ますの
あつえーしき乃ー くさー 中法ー まくーー のさー 海
きのいたー 槙乃ー くちー 山まとるやまー くち
このゆふくれ とらん源氏 さきのほさーー くろとのきー とざしひ

くーのいくたち 葉れー はしー まきれ乃すまーー いさ 他芝
まきれ乃ー くち乃あけさー 志きのあきーの
あけたてうけの稲 新六志ものあくやまの あふまとや
ひまるまー 神楽之 梁塵抄云 あふさとくんれ腰戸すきもの風のあとうるるを
くまくー 源氏くまくーと あやひのまとくハ扱のひさせきくるとくらしやとと
くまー 風之 新古 さしらるとや 小多さるまきれの板ーれそる
くとう國乃鏡れ山の岩ーたてくれかけ
らしー 万 とおしあけうく 宮也又あまのとをさ くらく
あすのいたる戸 とさす木之 いつ花ちてうれさきちてとうけと 源氏おいてもゆけり稲とさるまつと
の稲 きう稲之
○門 十四 日ひろ門とも云大子様ち位下尾へゆき御門とも云のりむとも

あまの石門 うとくハいはほす 松まくれー 浦よ石ー 狭衣詞 関

の石ー 北門石のこしを みさすしとや 小金ー あけ戸みれー とく浦

見ー 之 夢の告 状ー 氷とけゆくよしの屯ゐて ーとされかたきりしより あけのー むく

らみー 松の戸 松みれー 松の戸 すみのー ゆかれ

門 桑門やとちこも われるしとりくり 西の浦ー 狭蘭社百首後京 よあり菊社称名 ゆもりー あけ

浦ー戸 松きせー ーたつ色 ○世ましおしくて知るふ人もい かゆえそ見ゆる門小笋とみさ

まー まちしら あやむしろの安 まるー むしろの

ーやなれの ーつのー 松たてなめて 老せぬ

よしみー わかー 大さのー いちくさなきー まつた

てるー 志てしのー 龍ー 山城或和易名山ひめ布さくらをめし ようふの宮桃仙人遊むなし貞康 む

くく銭つまてーさ秀つまにし色てへ とん門さなつましそりやこじ くうしてとぶハ生みくうるやむ

くかうさ 未地 むくらよも気よわしこみとく山とくちぬ

ゆもりー せわのー なとい 妹ゐ夫や ー出 大浦

ーむくらのーをゆくまゆりけつま 家のよーい

きりー 知るれの袖て草むまふ 万 あやむしろり ○あまもそくあや志室とも あやむしろけさら門八はし

塵ふるー すりありけり ○そのつうくちのころるうとりしらま

う家いうくたてるとすへき

○簾 十五

たまたれ 玉たれのこすれさとそしなくあうさその海よるをよ

おもし まくたまくまのあくめのよるを ぬく風しまとあり

伊よそそ いよそれ みを あすて なのと 外や戸 まるあ

らすこすゝれしれしあしむしこゝの名け大
えけさとらしけりあとし荒楽のし　翡翠のすゞれとて四月一日
とふ詞やとらく　新されすゝれとうく候へと
ふく　白きし　○うけしら気ひとくの衣うらあひき　こゝの浦と
あふ日をましきちきすたまは
清し　遠之こゝのさくと紙てうやむた　さゝとちのうをとり色
まのこゝれさと初しともこらめり
つま　後撰詞にあり　さたれのうこうし玉しのあとめ
えすや
の海むさそ名残くいとしれたし海むさそたれすけ
ふけ　指き　もく塵するいよしうけさけらまてあ
出し世にもくけするあらまその女
○康　十六
まゆのむゆり玉海しあきとこ　志化もく　拙て宗と

を康さすもちきた
へとかりふさ　いつとくなうしあうし　あらところのうらよ　しところとそう
しの色たし　康の色たそし　すうきのしむくらのし草む
さふしおいつえさき　大康名とそし　とこれのふゑさとりく
まてあまれ我あふうしむさふとまのう色む
あしきし　色修　名のゆり海とと　いそりねのし
人なきし海そてをてしうちたらふ　康の邉　万拾
へたらす
ゆめよえ　行のよとて　わさけともましし海ま
ましし　うちちとひ　うまかのし　しめ涼し　○名まて
人あし火く逢へもくたれく
そのうつまとそとくめつらたれ　袖し　ちりをうこうぬし此
上　ちるを涼むし　とはついあけて

○浄庭　十七

おほまし　○むかしのたまものりとかちきぬきてむかしおきぬ見んかけきせむかしおきぬとんむかしをなく行とぬと云や又栄雅ハきちやうのまゝしやされるやされをそくのおほ貴賤を衣と云ぬるゑ　○わくしよやみのれまし此よそひらそのゐ人まそも衣めく志つとうあ帖とへの露ね志るときれむのれましよんきちやうのこすと返答とそく

○寝殿　十八　国見之

あしよ　せんはん殿ともいふ也八雲御抄　殿あしの　孫廂也又ほそ殿　よとてよとの
孫や　孫やれかつくほそ　孫庇の板殿　ねやのふ
しとろなり　孫やれいてふ

○柱　十九

宮ものしら　神殿又諸宮又ふとしきらるれとあり　まはしく　のりしらや又柱の殿　ゆるきなしとあまそく

ろーあ殿此見えし　いさうれのえてしのさくをひ　抜し　行し　の時一人廻柱之ときく
うくし　○よそくもふらくうるうきのく柱よ向まて小き八宮れまふかくれくりしらとん行柱と義玉よあり　楼し　門
いうろれし　禁中　松山此あきれのきしらかし志き
見ん宮きしら志さういつね志れよ　思をそてうつか
もちろうりのくろ日をと銭てふ水此折やなら
らん　新六

○差　サ

なるは差　○志う代をも千枝れるとくうひさもたけくつくもうさ孫よまきのむら人ほあめさうる差やとそく　いわのくうさ抱　深式

○障子　廿一

志とみ 寝入簾非志うと八雲抄ニ依ち内府西殿為中宮より泊伯蓮子麻呂雑志養道綱田村入簾臣是日為下簾為渡庭八廊簾子震毅化尻とめ此語諸者也入簾の名を籠腿とあらたむるや 志やうしのうき みのや そを代よあへ と

まゐ一 通入簾子や罢震殿諸渡七廻中尚簾子の名之

○格子 廿二

○こうしのかうれをとうふとつきたてくちはさく宮よあきとうけつ御ヒハ渡京格子也宮中上格子と云類すそこよあ階

山や 上せよる おもしとき 宇兼之 源氏 こもうけさる物たりしと ちとせを 志とき

ゑやとゑや

○壁 廿三

かべよむみふなといゑでしとむかふなとよあ

かべまくらゑ小宮て家とをいゑてを土一 ○つちかべ 九ぬつかかべ

しまる窓戸てものと ささすやどる秋のよの月 それは生え草 あれふのこやの一

とふるのう人をしく隠る道と このいとま十 七巻書本よ注 しるう 防 鶯

とりくうあ一尚ふやさうてうけさる指之 源氏 又壁代たゐ家をさし名を錦衣を一まつて戸をとりくる世より

○垣 廿四 付籬ついち

神垣 宮一 井一 玉一 戸志もし 紫一 こ紫一 源氏 大

一 源氏 志もの袖一 袖一 一重一 松一 しもつゆ一

業之 源氏 八重の志もし 竹一 竹あめ家一 ゆく一 もと

の竹一 風此きやを一 あし一 まちうきこすみふしうきこよ

源八ご海もうけれへきち うきせひまむれとも云名 あし一 此やもし一 あし一 此中一 やゑ ももひうきこのやうよくこた

のくゑ一 ゑ川一 御一 源氏みみうきうりうことへ八 内裏仙洞以下の清垣やとをし 卯花一

うつゞのちご芸いへつゞき 又うれ花うき縁とも うれ天ー ね 花の冬ー 花乃八重

ー花のころー きくのー縁 むくのれー よもぎ天

のー筆れー まくきー 志のー かやー 八重ー 廿重

そてーゆきー雲ー 中ー き をーくミー ころの玉

神や ーあけの玉ー 日 ぬまの水ー をとりさのー ー

縁うとらく ○おかく庭茉とうとせー雑よ いりの子きわもうちぎ庭きおくり ーわのそで

ふるのー縁 吉のー縁 りこふー縁乃ねかつく

ちはく 園れあうー 神のあうー めてあうのー

蔦ー 伊勢又呂 蔦りまと たのー ひめー 此二のうきそ 海神ありあとふー 日本

記云 神代主神海中ヨ八重蒼柴籬をつくりてうちかくれ給ふとそ ひとゑろ天 神籬 ゆくひも

おしつり子ー縁 さ世ー 雑の子まぜ とらむ きつきー みだれ

ゆくー あうきのす之花むにあり 山のさびー ーかある 旦草ーを

志ところに生 くもをひかくれ松ー より竹をとり

まかりをましひー 八重むー 一重ー あやひー

なりひー波ー 草の波ー 志をの籬 岩かれのー

竹れ籬 よもきのまかき あけー ーれうち

玉のーたきとのー 浙鼓れすやられとのとこふす源氏すとあり二 説き一説浙殿一説浙と野とやとそく

きりの乃ー 呂きられさらす 神しとそく ーかく かく天 かるとえー 波

せうえ天 すいー すいうき之源氏 扳ー きく扳 や源氏 くもみのまー 蜘の竹 とかて

すうさらちもふ之家のありしなりうきとらうん そてくものすうさとらむ 之指遺のすや ーりくみ つくつれ そふみむふ

まつりに大にたつてきたく 木も花にわりかうす 色有一海 ついちのうすく文垣のうち うち入

作り人 ゆきふあし 一あし 色り せきり花むらりあり 源氏ふ小りくりうきのりと まさとしきぞつくるすゑや

色りのふん ちちとより いもり垣間 ゆうきー色 あつむのを

とりの竹ーあるよるまーうち の字 なくて おやくるまー 孫

のうも ゆうむー文うよ よ色を大たうるを のこよ

ーねのねりろくち あしー乃さちりなりれ色

なそ あちらさりの天 ふ志そろへて ○と山田のりふたと こむりくこりきのあ

まちくられ 康りうりけり

○堂　廿五

こやゑむよあり 古堂や花 たうたてく ○たうたて一あうをそくれぬかさ らくのられみの岸よのあう坪迄ホ

○寺　廿六　付名所

山寺 き山寺山のこー 花の山ー 堂ー みその山

ーらその大ー お花ー ゆりとー あそしわち芸ぶや わる 此字ハ不定

ーつえー ーみつりのき らや 宮ちや とうて ー此 石をしー 所の

乃ー のまけるー 法成寺 くも ゐるー 雲居寺 志りの

山ー雲也をやしれー 雲林寺之 りのー此大ー 西大寺 ゐり

おー いろれりさー 大和花 り孫 泊瀬ー とよらのー 大和月 入お

明日寺ー う孫をよあり色やつくりんなと 那波ー 人巳見 つの国 揚

りつり大和柿法のより也 又ちとうけ迄とりよあり一とふりまく清水寺

大和我い 孫し あろーつー とよあ寺宗の乃しまきよらんたきなしよあり

せちーー 近江六乃色 ゆりさまて ひその山ー 宗のりなりとしりと

ー三井ー　あふみ　承和　三井の寺ー　ーのこゑすみ寺たかきこゑ　ふかきよの
のり得の　かきのー　十又大ー　○いはへのころの月たかくそなへ　のしるし　のちの十五大きのあと　かみそら
せか　出生ー　三河○たのむひけ行さえよもすがら宮ね　の世よいでてむまれし寺とそなけ　船ー　摂州○東寺　まゐらん
かる我をもうしらしぬるに　志かつい時ー　ちとの泊まちとつひ
あをてよこそまして　つもるの人のかきち
これとうし志まつひつもとん下霊やとうし毗沙門堂とむとうし北又下
御霊ハ出雲郡やとうり人の多さ死人のありや下御霊八神社なりとて上宮
や但昔ハ寺のなりしとなることと云こと紀
ふ山城に出雲郡といひつたへをふるや　嵐山慧ー　山城東　月紀　小倉山
蘖れー　上　同　なしひの思の蘖ー　月　並友のー　嶺　大津の
ことのー　うりやその里のやの池　大津まてうらとあり　月れ光の元よれー　山城
ぬ山のふりて　檮のーのかりや　万　月抹ー　○むかしのわかれし　うき
く　桂のうひとなし月の
きやしれめしうりいれそ　いそのこなかりかよー

山ーの時うつましてあく螺　世う孫のうこ
くこしかれー　のう風　○住すハ本のうこしと云事　ー流く
れ○住る山我谷本つちうめ　るぬハのみかあもれなりつる
よ世つりよう山をつくりめ　あふのしのー　源氏本りつくうさく
○郷　廿七　同名本
山里　山下ー　寛平百官名合又山下里　古郷　又古つをんうつうむく
のれのそうし宮ともいえり　とふ又あさちうりいうる
都かくらんせよめりとうく其ふ古への都や又經信云古つれともうくなれ
御家とんいそもす今をすさぬ家をふ云是なしの都とうめうふり住すとうく
あうゆとしみつき家をよめるみ多しむくの方うこもさし出さかりうと
いへうもんの家やも外多と八雲御抄之又根すと云やみゆうら人のすさぬ
子そうし住をたうみゆうさうゝ之古とうり古郷も
花をむかしのとれてうをもまぬ里とへきこしぬ死　みをよし
ーの住のひ　ーのこ　ーもなれ　山ふうく　のけを
むーーいくー　野口のーふ宿りつてーのなりのそ

の道こゆ〳〵きてかゝる｜ひさゝ　さとけなる　や源氏　ちら
み｜をち山ちれ｜花なかた｜子｜　是をむかれ里はのきをあらそふの幸よこ
〳〵ひし｜　河海番の中よ　あるさとすり　三山色れ｜と山｜花ちる里
源氏中河　あらりや　あの｜｜人　山かゝの｜なかの名に和
み｜　奈良や　｜とゝらむ声　山とやのむかしのひの｜む
と｜あ海れをむ｜　又あまのまむさとの　志れへすし〳〵　人あるす｜｜
とをられを　｜色万　かゝる家の｜　携れ花ちる｜お
をひてをあ気古郷　かるさとをむかしゝ志の
あの草ふやけれ　悉草まやつれ〳〵あ海｜むか
あの｜のをしく〳〵の里　山城八　富士浅今｜　里上〇日くられ八幸のく　さとと塵たてゝくる月田の面

ま煙たすひく泉｜　同家人　かゝつ伊吹｜　近江　生田｜　摂州同　稲葉｜　河内充　あつひ
しそさや八ちきり　丹後　玄刈のゝと布さ　但馬〇さち　又師｜
｜結そゆひぬ方　生野｜　あきあらを田外花　まなりつり
志の里乃らつしうま志｜　磐手｜　紀州くち　山吹　糸鹿｜　同上五月　ゐ刈きの海　磐
まへともみなくさまん　奥州こひ　池田｜　近江〇のその里と河せよまうり　まなりあしも池田の里ゝ名なれハ　入間
井｜　摂
｜　武州〇さらともとたのむ乃かりをたのこても入まの里にゝそ入ぬれ　ちかりし乃｜　山城八宝　内諒
迷兄｜　越後又近江時る　秦室｜　同右呉竹　羽束｜　摂州月摂衣　初瀬｜　大和うきめせ
香やハくあり三河風あらぬさ〳〵　花垣｜　近江白たしの中あとり　｜てし神まうり　濱払｜　と成たり尺
こゝのらし乃梅　すらんしろめさの　二第｜　備中天智天皇お芸二万人さ戸　いりかかうより山久や三りき
荻原｜　まるみ〳〵　る羽田｜　山城名月良うつ　風つより
物うしあみ　ゝとうら五文　ゆひりけま　十
市｜　大和月摂衣やとうまも良き夕立うやまにすさうゝましは摂たか　常盤｜　同古き秋をとちしれ衣をつ払為来れをきそれゆの

山里共　豊河ー　三河吉の　常夏ー　あゐそうら　志賀浦ー　ちゞ門白浪た
より　うきそこち　かてしこ　ちゞみうら香
竹　小倉ー　山城衣うつ　小倉山　鐘ー　山城康月紀氏　小螢ー　同上
夕より　露狗み西月　卯花
雪炭竈のそこそ　同秘時雨紅葉ころ　あふ見
サらしこ汲赤栽　音羽ー　もうつ時雨山ひと　小山ー　よみち　音無ー
きの国意　ひつ中　あふ見岩
立ひね　小田ー　昔代水　岩田ー　菜を元　雄琴ー　同右猶云あふ
み松風初さゞ
わらゞ代　岩邉ー　まうつ○見のうさの又とりしうきたゞくひ　ワ手も
うかとく人のさしれ松の一本千ゞ月
乃ー　肥きんう浦浪まで　わうちー乃ー　赤勤もひさ　山城月
あゆこさりしれ　かしこ　挂ー　ちゞこ
ろ蛍外宅あぬひ久うく　海津ー　あゆき　大和梅霞
乃中たうさしたしあり　見る迄　春日螢ー　ら杖神　文螢
河内さしの寺志　同右子る事とふ山
ー　のよ寄ち浮雲　神南備ー　すむ土寄ちらん　懸河ー　見○あ迄　とゞたう
そこの汐ゝの香ふひとにしふ　のさ浪れー　同右八　奥州
昔ちふ布をうけ汐のさと　雲浮説　神田ー　伊勢
月日哉　見の○旅人のみれうゝちゝひ夕　さうこ文柱
玉丹浪　笠縫ー　著の雨ふやしうり笠ぬけのさと　鎌倉ー　ぬらしきた

てし万代民　常州花乃郡
の戸秋の田　霞ー　をこても　くゝ見のー　八雲
ねふれんつく共つきし　浮説　吉田ー　山城吉田
まきう万代杖あさめ　吉見ー　いつも○月をたよりし見乃さとの秋
の里れい
よし螢ー　大和又吉野吉川とも　のくれ松風るしてとふ人もなし
のむのくり衣うつも音見よしめく里せより猶云よしみく
さよんつの　夜寒ー　尾張猶光嵐いとく　よしこつのー　竹田ー
国とらく　人まて恋しけ迄
山城　大和りみち露ありと
水鶏　龍田ー　のさとともより　音安ー　寺吾　河内　玉嶋ー　ひきん松
しくれ　を江見えを　浦山夕こ
を煙　音宮ー　そいの浦　玉井ー　尾州夕立の一村ゝあるま　竹や
三河○そゝりなる文もうゝしてらの　の系山浮成山秋納涼松
ーつりのりく代ゝへぬる竹の玉のさし　湊ー　信州たみめ乃里とよりた
月吉ー　この○夜くまうてねぬつき物とたの　のむとんのそぬゝ
めぬもくよまき夜し月うすの汐と　浮れしー　石見　浮
山城八　文字
浮気乃ー　雲浮説　浮寸とうきれー　八雲
良吉ー　大和八重桜句ふ玉に　浮説　寝覚ー　尾州哉云
奈良さとたち萩梅　那波ー　見の鈴衣　条
ほのとのり我あまれつ玉鈴　摂州夕まつて見梅あしまの時雨月

鳴海ー　尾州郡ちしき　名取ー　奥州　摂津ー　山城八雲御説　無何布ー
同上御説私云ふあつうて　村雲ー　丹後けみ　むかあのー　万○むかしーむかし
御姫のさとり　元　このさとよむ人たち
らきそこや の山や　宇治ー　山しろさは　うち川のー　大和良山れ
みまくりしきん　ろ家衣うつ月　うらうてのさ
とよあくろ　鴬ー　大和我云　かきつや　井手ー　山城山吹　野上ー　みのゝ　御中
わきて　くすつ　抄当當
　楢別よあり　大原ー　山城大原腰月いーしーりー里脇ー　同上御説同之
ーみ清みみ回　姫小松大原のふりうー　さくつのある
明れ月　ー三　大くふのー　近江蛍蟄や去年ふ年をよしろひそくさお
きぬれー　かうさう　大原のさとたのりしく初もかしなりかお
八雲御説　倉垣ー　備中○くろうきのさとおるうらう妹
粟原ー　丹後宗祇注　の岡も年ふりひこのりもそてろう
之ならー　草刈ー　うしち○古河の入江の藁八さうき　黒
津ー　近江志賀　粟中ー　てひさしく成ぬまうりの内と
のね草　あふ人○あふてよ石やす清ふうこ風きと
よ　鳴部ー　日○古へより今をとりよめ内と人　いうらてあしふうりりのかと張りハあ
もへてよとへよらりのおもそつく　山料ー　山しろうへ内　さとまちひ尺

よ　矢刈ー　三河○くりくのやそきうふあうひむとりみさん　山田ー　伊勢
秋そ岩ふ　あまやうようむ辛治乃おうて採りうき妻　いける
さろへ　やまたのー　あふ尺八雲御説　山梨ー　いく梨　御九月　葭原ー　ゑつ中
とりや　うき　治へのー　葦きうくふ又もやまつのはかふや見え日本我　まるや
不知のつきなも　昔の葉ある地の翁あり治ー不世とろし是ハ国を
楽国なりくし　笠田ー　大和いはふ世れ　松風ー　尾張○松かせのさ
つろそちとせりさ　妹知ふあふ尺　とよむれの松まる
ぬうひちーそすま　笠原ー　あふと○恋り代そちとせいをとせりさ
むつれー　江赤皮　原菜ー　わてそのさゆりふへ尺まずりーれさと　松
さちりくう　山城うつち月良ろ哀うつ寄よそふ
つ庭の床　伏見ー　日右京あり弓のまとぬさかへ君の月りさ
らふ松風御ふあさちりく　つるさ葉枕わ枕やある釜赤きう起むなー夫床とて
羽赤岡の草苗○妾うよふ道さるさし　宮る床たりみちと床と内幸まなれー赤の下道
まる　部人くうれハうん　れ今ーりハ　ぬくれたけのみーこの里乃雪の下た
ぬーこの里のおそとるたのまー　藤原ー　大和○衣りうのよつようー里
まち君孫て康又　もうりおとむ　八伏見乃されてちりふき君
古や共よめり　富士ー　もおうす　藤井ー　同右　二見ー　ありさ　大和

くしけ 同右すくさま 布留ー 花まろ揚 急河ゑとー 見るされりしろきあへをいく
外元 ぬ不もとるせしり又仙人の栖
とも 木葉ー 越中○若そむろ木のもの里のりう 之治○玄うへ
ありー いしうあーーをゑ吹そすりの山風 衣ー 呈れみくゆう
むきくろも衣のさとくう 秋山ー 山城月 嵐山麓ー 同上康月叉
まほふさう了は栖霞 ゑ何田 栖の庵
秋はー 大和 万代 浅間ー 信州 岩台 木幡ー 山城るをあきとをうらよりそ
くう夜うつうう人さう
衣手ー 同上 八雲御流 生の松風羽業 秋篠ー 大和 竹園さうちこむろ落又 あさ
秋篠の外山れ仍とたひくり
みのー 陸州 八雲御流 飛鳥ー 同右ゆうせこうふ仍家子ゑ附ゑ雪衣うつた
をむめのりゆしーのきくうたをやめの拂うう
らあ仍う風月あうあさ 阿波之ー 越お○あうち山ゑけの玄ふ成ゆれ
呈播又古つせ〻り ハあ気ーーのさとふみうれ隆つく
定憂ー 丹後○ゑり出あふよの仍とや是 秋日ー 近江あうはさす
ゑらん人のむのゑふしうゑけま 日うけ若光ゆし
ゑふくりうる紀とよの 青墓ー 尺の○ゑえやいうきの岩の下ちうるむゑ
あうりふあふ尺なる えた大うくのあをゆうれ仍と
あふゆの乃ー 近江八 八雲御流 高木ー 同上二 うしし粟津ー 日揚衣世 あ
きの嵐

まてのー 尾張りうさく 蘆やー つの国のさとひはさう月秋の夕
タとしろま 労ゆうすむうく五月雨ちとう
すくもさくひま雨帰りう衣うつ 葦小野塚ー ひく 揚衣 餅馬ー 上野 郡
まりりのあしーやのともよあさ とさ
櫻井ー 山城ゑのけしまりうすとふるひく あすのとく
花りみち卯三河よきとうく 佐良之奈ー すて山のす
そ月衣うつきうれあさ 山城諸ゑ色とうと○玄ゆう定ゆ之えうの
衣月よきうしーゑ 之箕ー 里よりもを至てひうらなうむハ畑めと
よ仍 大和うしうろも
うえ 気なれ乃ー さとのー治郡 みちれくれゑひきの
ー 義豆野ー 山城○いもさくきそりく 三
ひ人ふみなよちゑうん 青野ー 三河あつら ちり櫻
笠ー 大和神 まろ仍 尺ゑとのー まうう○播れとゑうの里よちくをとき
て道のなうちハゆきうくぬくる
三輪ー 同右をしね若揚衣外 尺付ー 近江○旅うきくろうけの里と
むりうよりとく振ねて宮をそ
むきゑ亭附ゑ夕玄
諸しま 浦吉野ー 同右我ふ武兆た 浦浦ー 仍う尺揚 伏急瀬ー
れむのうり若揚 つこま
つの国ゑしもむうし 尺乃ー 赤勘○五月雨ふめうくもゑくチえ乃
月うしー松 さとの门田のさ不へ急きとうや 白河

ー山城花ゟ　堀やー　そのくかた　志賀古ー　近江又志賀山里ちゝ云又山
ーてーて　煙あり　志らのさとちゝ云宅部の月
まとひ
頼しれ清水ー　信の　滋賀楽ー　同右卯花　宮殿柏　信夫ー　かゝる月　卯花山吹猪志
うなのー　かゝまた民商　信太ー　和泉卯花ふかこきかゝり　日笠ー
人あゐ鳥　月光夕志昔條
近江ゟ云丹後卯花くゐつきるに　搗ー　同上うしさゝう　信神ー　同右
去りたりそよりゐさす　但是未定　志を
伊乃彼　糸ー　まつ発れ名　信越ー　まゝり○あつ戸ちのかろあしの
くとさく　さとうよ知りさちて夜をやうしの
夜とりよ　岩生ー　山城○世をとろむく内出て老ゟ大　近江拷村
らん　糸や世まうのさとの葉の奔てよ　莠安ー　るかくく
ちめぬ　図やー　武州やとや　大和○ぬかきき海のうれろとよ
ミ　うーうー　茨原ー　く思ひつくきーきたゝのも
うくゝの　住吉ー　摂州宅附　同右○まゝりうや彼見の
さと秋　る是茎松　茨原伏見ー　仍とれあまーよりとよ
めつらき昔氣流之天神所所花やあれまくれーまの時る宮むる面つきあ
ふかり世をゑすんころもつさしまうあれまうするかしろ

○村　廿八　同右糸

一むらさとのむらくもの所と人のあはれの
ー　丹後○白菊のうつろふのむらすむ　いてはのー　紀州かゝる忘れ
ー人にくろう見るうるう年をとふてよき　つゐへ我云く
後　いしくらのー　備中　春色のー　丹後但備中や○見ふまさら
まその所代のけ　ましきのー　同右　千枝ー　去色のむらにかけ色の乃
山さらすき　　近江部中よーてく　とうのあたりの名所
うるさ名ー　よしー田ー　山城我近江かりかすりよ　よしみれー
秋をとかさめ志くれ
名り所氣ー　山城ちりす　足柄ー　丹後宗被但　高花乃ー　あよ
夕り茂糸八　やすなし　足
なてつまー　同上　たゝかくー　同右五月雨　田中ー　日ゝ海ー
初のしく
なつむら　名戸井ー　八雲　たんきもあよ見○秋のよの
芸苦より　所統　長良ー　ならろれ村のさと人やさやけさ
月よろもうつく　長田ー　たんをやゐ　うしうひ乃ー　伊
なりひたのゐね　のかのいね　勢
歌垣ー　同右拓人の　雲田ー　たんえなめ　丑ー　同右○てあつうそ
まとひ　　つちい孫　　文もみ西りり朔日

新勅撰つる梅やまざくらの一　あふ坂
のおのむし　ひつ中　さなへ　ぬれと　絲末一　八室一
志ホ一　あふ坂春哉○とれわたなるかけたりて志さこう代八ち
へのすゝしくひすをなくつらりうさ孫よきされむらん
見一　山志ろうめ咲　かつ魚乃一
のとまかうくの気きそりしのむら
らのうふあちれ一　三河　深江れ一　まつり○五月雨の夜あうしれた
まき　籏お八　雲洲説あつまの一
移民式ふ紀　上野八雲洲説なきあ　あふさ気みつ代て
伊勢向れむ　阿蘇一　ろれまちむうとゆり　若柳一　民乃むの一うさま
みひく　あの井の一　たんそ○やすさ志賀我すへく　さくれ一
ひつ中　ゆつきの一　きの岩代さきおるあをむ
いせ月をみちの手　名川れ上山み　木綿園一　あふさ

○園　廿九　日本紀
清園　みろれ　神世　花一　さくら乃一　梅一　竹一　竹乃一　山城の　禾世
一畑　桃一　是何跡之一　条　大宮西世尊寺南　わか気色乃一　我家　園也　よ清め一

わかの竹乃林一　わか一　まつり　家れ一　芳野花一　大和
宇治花一　山志ろう○芳之一　くの涙や嵐か　らん世　ちうち山の杖のむろれ　あの花一　あふさ　宮本苫
すこもてし　名浦風苔れ人　志の海れ見一　木綿一　ろう
まれあうろ　見むそれ　日た　ひらけ

○庭　廿
みれ庭　むかし　何気の一　抽をつら孫一　なと　あくのを　と入り禁中り
の一うけちの一　一本の世　一ひ見　文庭　とのゝ　あり　世あのうなれせ
のあきし一の義原一乃萩一　一の色　一の石
すゑをうつの一　ひききいや　き家の庭や　一ホ　あさて
乃海さき　庭のまさこのつち　あうひとともり　玉　あく一　一乃松　徒本　山影　一草
挂気入を　古法指道秘　庭八雲川説　あし名　我只朝むく　一説八雲　川説松ふ朝庭のまつ説　み三つ　玉

のあんこうへ 禁中や 花にまかくし 六百番歌合也 ましこ ーの
萬○はその野のをむりうへ萩 萩の花とかりかねきみつ手て居 花乃ちりかかりし
瑩 あまこれあをー子たれ
はれうふこりけ 露秋つまりやかくさかれー 京
ふやけまくし ーりをむくうまくし 昔れうも
乃所くつませぬ山里のしと いもねのし 秋歌也 し
まころ石まく ○秋風にふくのしぬの落葉て 中さまころ石まくうとそみる
いさこまれまくし くれ竹のーれかしと所か
せんさい まされつかま萱花うへ まこと 源氏
○縁 卅一
そのこ 名しれのまこし 源氏

藻塩草巻第六終

藻塩草巻第七目録

國世界

國一 郡二 鄙三 夷四 唐五 世界六

世間七 冥途八 極楽九 須弥十 龍宮十一

藻塩草巻第七

國部 付世界

○国 一

日本紀云 伊弉諾尊 山国を自曰日本國

浦安国 細戈千足国 磯輪上秀真国 倭大己

貴大神曰之玉垣の内乃國といへり

我國 又八幡詫宣他の国より我国とそ我国別日本国也他の国を異国や他国方 他國方 こそかれー 物さかりまろ国 やとえし三食津

あしはらのみつほのー 是我国や ミつろー

国とうけつ王方 やおえ淡海 やまとしー すんての国 ことらし やまとかれー みやしまくえと ぬく字なくても

あきりしま紙浦しーや須ー 我国之又中臣祓ふやまと国とし ろしめせよとりくり 藤根乃

ーよしみくー 是そいうふそや若大和也元て夢る也 ひのもとのー あめはちれ

うらやすー いはふ日乃たつくに乃ー神ー こまへ八神国の例之

やまと志まね あま日本のるすもとえとえしー 是天竺唐日本三国れすえ〇墓よつえくりつさそ防法乃名なり

ねくすめら四のうこうふ 志豆瀬のー 国せ知り しまのも遊やまと 津ありのー子

ふそのー 己上二ハ只津国の也元又趣名ろまきあう へえ大低趣名ハえいりくとおかゆくや いはる日れ

本乃ーわう日乃もとやのおほやまとしー ちはや勢の

ーちはやぶるのー 又こりくのちはやぶるといふを隠口山河とうくら くらくれくこそのしくりまくらくハ字の

訓なりゆへに其のそ連あるうこりし主お什りしうさうふらくハ口のま

れ葉まーて大なるう江よ淵まろう淺宵のいさをゆへや所詮此所ハ山口よ

王入て奥みりきあま發口此初流 是いうふ

とひちうくえそく是油中の流せやりしちーるあふ見乃ー

そや 雲のいさての浪とは之 是ハ越前越

すゑ ーれまるて りそれハ雲の所ふ注之 あしれー 中う又越後

を見るや　とらし　是は浦や雨引兼抄出ゆたかなる国々と　云と私云是前よりんことをよめるおらし　ある◎
ゆきを日よむかふ　しとよめるに　常にを日向　此国のるや　よそあるべし
志をし　生国のをしめ　より出る　し衣鴻やさしと　或は浦とん大和国の内此名　之皇吉に崇神天皇の磯城浦
瑞籬宮欽明天皇磯城島金判のをすり始を式浦といひても大和といへる之日
きなりるへきゝ大和は秋津乃趣名なれとも又一国の名之されも大和しとの
をしき志戸の道をしやは日本なれや武浦　うらうつやさしと　古事記云
大和を只かさねさる詞なるへしとそ
撞饒速日命為天磐船翔此国を見廻給とて虚空見つけ大和国といひやとらと　あしきもろ乃し
日本之　秋津し　又あきつ志戸しとも　又あきつきとも云　とこよのし　日本記蓬莱といへり　是をしとよべる
孤をよ　うとそれし　外国の日本記にをゆ山陰道　をそとも此るとよあり　人此し　志つまへ
とも云
ゆりあのしわのし　丸良山　はるさしし　美国や美のをとあ　たしやらむと
ふひのし　後きんひつ　中後浦之　花のし　○人のをむやまとてそ此くよなれ　やこそしめく山とちつせの山とゐ

れとくもへむし　うしの国や　あけまのし　みとりうなくあつさと　云を日本記第七巻に日
日本武尊相摸上総国小往まきむとすり海中よりして暴風忽不起て王船漂蕩志
てわたるへからさりしをきらくらぬあり弟橘媛とよ穂積氏忍山此宿禰のむ
之王よ啓して云風起浪涌して王船没すべき国海神のしわさなれは賤妾か身を王
の命を贖て海よりいらむとなや言終て民をとうよぬかそれ暴風よ宗ちや
むて舟岸よつくるをとえとうそのゝよ時の人も海を号をて馳水とと云上総国より
陸奥国に転入蝦夷既に平ぬ日高見此国より還て西国の方ひくちのくよを
るそうひのくましりそつきて酒折の宮に居し給へてより武蔵上野を
めくりて西の方碓日坂よとよそり時よ日本武尊母よ弟橘媛をしのひ給も
むあり故よ碓日の嶺よのぼりて東南の方よのそみくえ数て云吾嬬者那ね
山東の諸国を号して吾嬬国と云けきてし東とよいる事をしも是ゟり志をとれり又
其中記曰南に桃都山上に是大樹各桃都と枝相去三千里上よ有天鶏日初出
て照此樹鶏則鳴天下の鶏皆随く鳴又有東天鶏をしめてなくよ天下の鶏ことくなく
と伊へは東国をゐり鳴あつまとふ処と云しあつまをそうしして東国
や又兎説云日本武尊事とうしきひておやつとやくとひよきの名之共
より　わかれしろ鴻あをちのするや　神をちくそし　と浪とうえ志れわかの袖
汗くしのし　又志らぬいのつくしとひて両説あり　一よ是白縫や一よ　を不知火之　日本記云大足彦忍代別の天皇治世十八年

五月壬辰朔従葦北發船して到火国于時日没之夜冥不知著岸遥視火光天
皇詔挾抄者曰直指火處因火往之即得著岸天皇問其火光之處曰何
謂邑也国人對曰是八代の縣豐村之亦尋其火是非人の火そや故に名
得主を竟兹人此火故名曰火国今世に肥前肥後といへりやとうく 衣
のひちろー 云云為後也日本記云儷武天皇巡狩東夷之時
新治合鉢井と共泉浄澄可甚愛時洗衣此袖垂
泉沾漬袖之義によりて日夜と常陸といふ又常陸風土記云
此国不隔江海往来此路一つにつくつくに日語といふ うちよせする
するうのー ○なさうとのひれくはうちよせくるうのくまとこ
てくのくにのさうひにおてしあうぬしのたうねと
あまくりしい中天にくうり荒る名をひものからをとりとなさよそのうひ
のくにとへなよやのほうかるう香をふきとつくくるやうちに悉るきるう
此をにとい是彼多し浪の船をおまと作くけよりせみ核くよ中をやしと
並立して二の山ありて是すなわち胎金両部の象跡や此両山の名を昔は東海
道の驛路にうけあそひに換老の用ともありし山道八觸穢あとむきいるをむ
明神とをも世経けれ八おりまろする内のくことに中世あといひてし冨士山を
海中よりて濡出しし浪よ源てう内連けるよ法の天地あれとてたてまひあうひ
けうを白浪おうそく此くよ山とうすうけれハ中とうや蓬莱とも云に舟合す
所者や
ところ ことのく國世みた乃あちうるを みなし行のや 衣と

ゆくなさこの國 伊豆乃國 たちすける 遠江を
とはつあみ見えとよめ也 ゆゆすうく ゆうて
土佐あ 周防 万 あ孫こうの國 新六 志やまの馬りう
いうく
かれうの國 伊勢国之 あめ作ちうらくめし國 万
山城 大和 河内 和泉 攝津 伊賀 伊勢 志摩
尾張 参河 遠江 駿河 伊豆 甲斐 相模 武蔵
安房 上總 下總 常陸 近江 美濃 飛驒 信濃
上野 下野 陸奥 出羽 若狭 越前 加賀 能登
越中 越後 佐渡 丹波 丹後 但馬 因幡 伯耆
出雲 石見 隠岐 播磨 美作 備前 備中 備後

安藝 周防 長門 紀伊 淡路 阿波 讃岐 伊豫
土佐 筑前 筑後 肥前 肥後 豊前 豊後 日向
大隅 薩摩 壱岐 對馬

○郡 二 あまさかるひなのみやこなり也

伊香郡 あふみ近江のくにのうちなり きけもうたしるし 錦ー ひきこうつ代○さみつうぬ令うひみ そ我きわうつの郡よみ世もふうとも

名取ー わうたう陸奥郡○あさうりうきのおふ地り ぬ時も下うちとく此抄とおふぬう 宇和ー いよう伊豫と世とます

ぬ 杉くれー ゑひす 豊浦ー あふ見 ゑいをけふのー まうたう 信夫

ー 同上つみれ名かくゑいのちくきんのみ 吉間ー 〇の国りうの 筑紫うけの神 日根ー ○いつみなる ひのれうか王

のひ補りりとうゑはくうのひわうまし 伊那ー たうのなうりみ乃郡ともりのふよう 雅うたおあてゆとくいふらん 宝

ー ○さの国やむろのみやつこのうちすりう きこともみをかのるれそうかしらん 讃良ー 河内郡 都留ー

付坂時令うひ たきのー 丹波むと けるるき 綾彼ー しるく 出雲者の 安芸ー 門 長
へ白玉藿 朝気ー いせ 岩 いせ 安麻ー あやめれー 神楽よあり 梁塵抄
人坂
○みちのくのゑひすれ身をりいけ時ちのことうてなれやあしぬきそうか

一

○都 三 ぬなうくも

ひなみ のゆやむ又法国の国府とさむとりくう我をゑひす ーひさう ひさう ぬふう
乃すまうをそふとい へと三都と所きところ
やーのみやこ ○あまとりのひなれみやこうりあうひとしうへあひ
すうをいはうゑうしゑひみてぬ中やみやこをきくあ
めひとしゃ天母るう迭きひろのうことゝやこうのそうとさ汨とこうめく乱
是を家お越中よって他ならあをさう此ひるとくみやことくひとつそうすてあ
府ふ我ひふよぬをりしうやことあつゝも世よいさてみうらひ他のぬ中人
はわうやうふみやこゑものゝ時まし老わん人としく京とそもあふましとよ
めうやみふひろの兄やこ人国この国府や国司綸旨を頸よりけ
て下て国府ふさるくうけくをおうて故ともれん同令の都とうし
時ぬなり 丹なりのひさるぬ みうめさ うや 源氏 あり波時の時ひ めうく

なきぬ中ハ天よりくだりて又ゆる ゆへりあまさる所とにく　むなのなから　雨くり
ちりひなの國　りかあさき　後撰井中ぬすへくとにく　いなりまる　ぬ中之　稲莚之
はりた　古今井　なりく　ひなの別　華夷と書てみやこひなとあてぬなり　とときねるりのおとしへし又日本記ふ
といへし童蒙抄云ひなのおとハ隠岐国の鄙を所りて蛮柏のとなりたれハ
よあるく又埴山のはるとひわのまさるまよる鄙のおとよるりをありつけ
まてしもさるへしされをまるれひなよてうるひされと又みやこふる
ねをあるつうぬものをもひるひるりといる事もひなのわり連とハぬるりふ
ありくとりふとある八五下ふまるし云ひをとひなとりみなしも文字よ
てうりりされ東夷南蛮西戎北狄とあるく四方よき物たれをりつ連のりく
まてもなとうりしさるん又云四角のおとしもひるとくんりひてん所連とその
ことをきなりひをとひれと云之　又四方れ名ひす八漢土のいなせされを漢土の
東夷国ハ諸西ふきくてそ是皮当と　とりそ宰府よつきく大飛経被るるそうけ
うまてりへ至しやされと皮四方の名ひをふるまらんて日本よても四方
のなりひをなひをと云つなるりされもぬ中を去とそも江丹波大和河内な
とくゆりんとしそこととくむくひるれりりんとりしさしめくとうしん四
方のさうひをそるとうりしさるんされも方承れ京くもさしもうさうたまとも
らうこ

○夷　四

なそしのをやしりちし波し船なひきと　○奥の海やなそくりし
やれ乃のまたりり我もなそまひく風をふくらん○こきみりてくすりまもや
そんみりのくのなそるをみせし秋の夜の月こそさとん古たとうけまは是て
なそうされともすより目をもくもらうさむと我のみ時つれ少をのやう
ふ所物とみけハ旁のやうふ所物れこりてをくくく敵やされおよりてうく
よあ所とらく○りさけも所あや見れとされよまりのよりりなそうちしさとを
りふ至こあるり

○唐　五　付異国

もろこしのもろ國　りろ名よ名をとのあしける　もろ人　なく
のりしあま人　人係戌之届承うるや　七賢や方○伊よりしへの七のりしこまく人　くもら
百済国　あまくへ　新羅寺は又ある抱云新羅をハまくとうけ　孔とりりみまく夫人う名て不山的　こ海る　桑
やこまのろあしと伊つる　とくよ　胡国之八去而経すへくとあるなな所み
もうらのとうくとや　とあくとさし称此国勝非引の中央よ

大宮山あり是を甚深といふ說ふ甚深とも云て高山よむ所とこそ此山の西を
うのみりとよくの末なりあり東ハ震旦南ハ天竺西北ハ胡国と申やと
ろし為ハこ連しりきさるり○こうしさうハこしちと　こまふ人
よひとりひろさしん抄ハさやこふりつるりり称　あまうしと　や又剣
こま人　もろこし人　うらく糸る　よみり　こ海人のしめりく
さふ
まふやうと　佛乃出る國　天竺や迦葉よふめつさりまくらとよ
ふ源氏や　天ちくまで四季の内に秋すしとらく
総て秋る化国みとも　わしれ又山　先を天　ちくや　般若臺　○般若臺よあさ
ふつふ九え衆や　めぐと入てし流を
絵も哀しり初そう　もろこしの國　もろこし人へ　うるまの　もろふ
作くまでこ志慈結　国也　とこ入
所るや　つくしらくの湖　一流日本ふあしを　よもきの湖　逢莱之
此湖ともいふ　とこし　よもこ

○世界　六

くるしき海

○世　七　付代

のあるる世　上代や　けのるまさるし　代上古のる　くるふし　末世
や又と世と　こたひ　古代や　源氏　ふころし　けてらし　新世之月と宦　や源氏　しりそあとを
もふや
き様　あるく志世　あさくたりくやそろう人　をあたし世とふり　うきし　夢のし　わの
我世をへるん　子し　万し　しをあたる物　君のし　し中
しとりくり
みやりふるし　き帝し系し　しうりたしぬや地　てらうしぬ也　やもと万
しし由くふ　よりひ乃もくろ也さふ　けてかし出る国も也　しさく我　回　来乃しこ
としけ気し　をくくこ海を我店代　内外　官之　子世を流
とことく乃なろしの世帝　こつせるん乃し　この世よ　くうつせ
世くをえ万りとつ孫もしとあり又うつせ　えの世りまよ　世
まるり蔵さくうとこあ我まをりるきこいふくて悟とうし　しけしひ　此

すゝとくゝー　うりのくる国にはあらそ世の人のあつ床にもまゝくゝらあ
ひやー　世未深れ秀もきぬりのとこよりしもりされせ多そうきな
よ世代く　打さぬー　道あるー　神ー　万ー　のさ
らり　捨遠にまあり美流そ云万歌の盛とらひとさりしきう星やとらく世の千
のとせのさりあとのひ花秋ふ坂ぬとひひ五八十をそ至そさうとよあり
くらし　らり　みつ　世を経や　為書苑　子世ゆや子世　千世よ八
是いく　あとよう申承し　千世よらし
いふ万あれ北の主就
やうさ孫句しとらし
てのーそむくー　ー中のもしつとたて　帝のまへと給　てし源氏を悼　なら生
世とろむ　もを行るー　くらも　世とをつれ　山ー後
のー　あ元のー　なれーー　のむくぬ　ちのあぬー
あふめ　あき入ー人のー　ーこゝもりた深　若けれ人の末よ　世の残らら～世
とこめいらと云も　まの走かし源氏
ー此あつまさ後　あり秀入ー　ーのうき入
めのうれ　すむー　ー法りしを　世よさめー　まれうち源氏　ーをた

深ー　ふあつま是みつ　あれとあるー　ーすりーをさ
色とーふあつまふるー　ーのことりり　聖乃治代子
世さ世りけまくをうし　あき入治ー　世乃ありう
さりうる紀なと　ふ因子也　かして打りひ打き入てのうるふ　紀万代ー
とうき　わされ　孤よう申承　たのしうる人秀君りー三子
ーつく　四のー世のなのゝとろしく　りくあのゆ
かれ治代三ー　源氏　よ法のね　世よたれぬ之源氏

○冥途　八
あられ法のよ　天なる泉　去その山　わくつま治
きりせ　治国之　よりふ色れ山　海と極ひ山をうれ　まるなと

よみぢ さかひの海 是も生死の道をいふ 此二つのうへをいふ なりくれかく

地獄の名也

よみぢの國 日本紀にや 黄泉とかく さくらだま 穢泥冥途とあり

さかし 卒人をとひきたり 三つきなかくいへるうり源氏日升の花うたり大なる八木のうきをいふうりの流うへとこそ気こしめしつさかり

るをもちらむときも經ひていくしく年をへてくらすあり

ち〳〵ゆうてえしあり夜外つれのことをくとあり 三つ瀬川 三途の河

や地藏十王經にいふ葬頭河曲初江の邊にたひて官廳あひつらなりておほきなる大河

とうく則是葬頭之亡人のうさくわたすところを奈河津とすつくれて其下に三道

一ト瀬山水の流二つ江源の湖三八 擔の波あり

初開男を尋てその女人を負しむとあり

くらくゆく 夏道 死出の山たどる

○極樂 九

みくにの淨國 をし 志死みち 源氏ぶうらは八宗のうきをいふ

派祈と申す分くし經よみひ

どしく めぐ經を○八いでくらうんとおそ気をのこおぼえをハすし気きつると

おり しめしくらぬへ気をとありこれあくらくよりきうをすへてくらふ世

衆め〳〵の花ところ 九の志やくどもい為るう 九品 蓮のうてな

たのしひと極樂國 九品のもちおき 是淨土之

淨むのあ事し ○君ある佛にかりといふをさせハ我や淨土のある

しなりまし○極樂へもまれけきほくこさしもう

とつとめそねさくをところうありう

○須弥山 十

すみの山 ろめいろの山 蘇迷盧山之 八万由旬といゐ

星。○一須弥の四の洲をてれ をゆく月日や國をまうくさうらん

○龍宮 十一

さみのみやこ 氷の中 つまりの人 の海中の底く かくうの宮と

ともあつま ○ちさうあま達そうの天志さりうを山ゆをとぞう あてとみ

の文ひめあうひし 抱をぞ神武の流るく

しりへ　○たり垣　ひめ垣　やそれく庵を伝ふ都宮のかとゐ説
あり佂来逢新垣の不よ宿す所不定説

藻塩草巻第七終

藻塩草巻第八目録

草部

草一　若菜二　菫菜三　芹四　蕨五　土筆六
藤七　款冬八　躑躅九　杜若十　卯花十一　葵十二
牡丹十三　菖蒲十四　瞿麦十五　百合十六　荷十七　夕貞十八
瓜十九　阿知佐井二十　荻廿一　萩廿二　女郎花廿三
薄廿四　露草廿五　蘭廿六　刈萱廿七　桔梗廿八　龍膽廿九
紫苑三十　槿卅一　萱卅二　葛卅三　蔦卅四　仙翁花又卅四
蓼卅五　茅卅六　蓬卅七　芭蕉卅八　葎卅九　荊四十
長草四十一　忍草四十二　菰四十三　紅四十四　藍四十五　苔四十六

茳 四十七　葦 四十八　濱木綿 四十九　茭 五十　蓴 五十一
萍 五十二　藻 五十三　蓴 五十四　蔓 五十五　蓼 五十六　大根 五十七
芋 五十八　大豆 五十九　大角豆 六十　小角豆 六十一　粟 六十二
薭 六十三　麦 六十四　麻 六十五　苧麻 六十六　木賊 六十七　白朮 六十八
羊蹄 六十九　駒繋 七十　靫 七十一　射干 七十二　犬子草 七十三
白菟草 七十四　白頭草 七十五　水葱 七十六　莎草 七十七
淺茅 七十八　饒菜 七十九　折敷菜 八十　莧菜 八十一　命許草 八十二
苦蕒 八十三　野老 八十四　下野 八十五　山菅 八十六　山女 八十七　太針 八十八
母子草 八十九　小ゝ妻 九十　馬束花 九十一　木芙蓉 九十二
竹 九十三　笋 九十四　和名わく 九十五

藻塩草巻第八

○草 一　此内出よしとより葉にあるくさうのうたかいし志の連共 先立字とよみとりをくさうかそあるよ同きうく 河よあるる葉之 又ひ水若をいふとそく但あまつき おかに口傳ありとも三るの大事の秘傳とも

かしら草

ーかねー　新やかぬわり 葉ともいへり　わかーー　かねよりー　まかー

夏ー　秋ー　冬ー　冬乃かりー　うらわかえー　わか 廿四よ

うゆる之ねよけ まみせ傍とあり　かー　かーほむ　てー花ゆく　ーのをし

つ花うさ　ゆえて　生ゆくくるー　ーのりやわひ

りもと出るー　萠や　まくめるくれ　葉のなかくなるむさ○もいそ ひとくれかり葉けさとれハを

をあるくれまそやうわり　しかー　葉さらし　廿あり　ちー　さ庵くくの葉やみ

まるりと連去れるく　露のちくさ世乃ち

くさなともへるハ葉よあくする事も

こしき庵くくとひもし

秋乃七種花　荻花尾花くずなでしこ女郎花ふぢ袴あさがほ

ちくさにあるを うつかのむ やちく 八千 経之 いろく 文経之 源氏 濃露く 八月中旬の子 経や○をの名
れちくさの中に濃き葉あるれを うむ脈霧やをくうん露玉おあり 二葉れく 生出る ゆく ひとく 七く
若中 百く りく葉の花さくとさり又りく くさの花乃ひをとくとも 志きく 一ゆりの志
けり久 ふるく 古草く 萌く りり 万 霜の浅くうれ枯く
く おひさひうけるく乃志をもうれ 下く 霜乃
下く 末れ志さく志さく やま 色りの志たく 松
の志たく 色やの志たく 下葉ハ何りそをしし よれり事みもいるり 也もれく
うあく 台のうけく 岸のうけく 岩りきく 岩のうけく させ
夕のうけく 氷のうけく あさの井み云ゐのうけにおふ脈くさく又ハ 篁をいふともさりも放え氷をうく脈ふまつ
てとるりり又あまの 河と浅くけよあり 庭く 田く 山く 壁く 乃けり いう

あくりるき めくるりうり乃く 袖中抄云○志か見て呉見らくすまん くふうらくれおおき呉船云浅彼り称
日りえく十形意狩あまらのてい非是古るり非是真淺あるひハ是お對並お對
故日新意とめ死王志かやくあひ言ふりそく○志かミてをいりあるれるれ
葉たくしみらくすくなく二かるよあかミ數不見たとひ如湖関之侬盈时を
不久落时ハ王浅くよみゆるおく致為喩妻古の離るを故曰新意と見付すく
るうして言歌大是お對を狩与古旨とおよらり少又雜おすハ消息云く此哉、
東之方まそこふらくまくたくこふらくおかきとあり此哉うハみるひす
くたくこふらを歌おかミとりひるり大名同る也ミ孔日二本る歌とんある
ハ言のそし志かミういろれ葉をミりひおかくミるを歌まくなしといふへ
きふハあくす志かミつ伊その葉をえつ时ハ見るもとと云ハミれうくれぬれ
つる时ハわうのよミ脈とるハるまもるとをミしとみさるとさり而達も志
かひて見引とりひさるむるをすくみくみ面れん見ぬるハれかりるゝ無名
抄云此言をひのすらもやつへし伊それ葉をこひしるん人よたとへて志か見
ちぬれハうミのるこへうくまし凋ひぬれん出くるを見れさんまれうり
とよあるうえれそこの志かれみちひうこと一日ふ一度りけりすみるすや
时よう月の出伊引よをさうひて不また物もつねよみちひる事もあくてた
ゆれしとるし此言のむそうえの志かハみちそハひとるあるて尤きくひ
てえるく日と日ありてよみちわれえ十日もサ日をありてひれしとのきて
さうかるやうよよされくるりこれおか言なるあやまりとうちまけえ浅

ゆかりといへそのくさえしほのみちひるにしたがひてあらはれかくれくるまで
おなじ程あれともあをくれめもり達見ミ海なしまへんのたまさかにをりく
ねくみしぬかつ孫にしたかのえちかくしよりやうにれはゆかりといひて京
ところの物にあさからぬし海としけるにたまたまはよりてあさきまといひく侍よつ
ねにあさかりいふれかやうにしれなゆかりかしかきかやうにみえしぬるすゑ
おなじみとあれとも行かぬ押りひのあなかちなれんみ田はるすをるとた
まさかにれなゆかりとしめかはめてしらくしてそきこゆ達は京いとしをかりら
むかに指達に入まして六条左京地といへる乃葉ありくらしかきれなり達とを
ひきたるる葉は数もしらずうれは清まりすくなからうしなみくれはこし
かきはこれかくれぬさかる菜すんたるくはすむかりみ田れをと見るはすゑか
くみぬをれかかりとよあれや二達をひりき海にあるへてよも山のはると
かきつけなかりつありさいとへはあし狭をたかくして外のはこしかさ葉は
それならさ奥義抄にいへそくいへる乃葉しなえちあれそまつりに乗来なとそ
かつきみそくしかによりてさうなとれなり事をたとへにとりて人をえるかう
はまくなくきぬこともれなかり事としとよあ事そ そこむとしりかはいそ乃葉
の志かに来くれあらそれへく程をれすしけれとむかしのあかききにこれそをを
くなくみぬことんれなかり事くよめるやとありみつにさくさまれあらしをそひ
あれうしをえしつへし左京地を見けにとかしてきなかきそみしえしかき葉は
みしめてとあり清捕はくさひとくらゝとりてつえし来えまくなくおされた事も
らんなりしとありえつにをまかりえしとれへをえ川とかえみをすといふ

御菜
にしかるの演成我にをうつときえしれ見しとをとりひれつる附
はまかりに見ゆるといへは延三代皆演故にたり本可用之
こま達ある
み菜
こゝろされひなといへり又かくこゝのあなやつ葉ねにれりを
しを ひ水葉のれひさるていまかみに葉の花ともありしるの
すて落とえくさとあり しみ海しをしほし りし侍れ
これはよくある葉のえや 菜とよく
字あり しかしあかしかまししかれ あ達る葉 をかりて
てにも
ゆひあつかひて侍りのさとりにをひとつ孫 しと手折 万やえさある
たれしかりかれかしとらし但是あつかいす てきたとへは
かれすしの達ともしいつ達 むすし 又葉むすみて字あり 根 菜
の葉をもいふべし をいふ てよむ
本もら 万之葉木すする意は本也 侍く秋をちあとあり しわひ 源氏ちのくさ乃た孫をいふ しを尋く
しうしやえろ あえたまし 万 しもかろむこ 葉菜のあなた
まるくむきちゑさし かやかひめ 菜の生さるをしあ さいて
えけるすひくあり のなや
侍ら くさの名や 統兼説きのくきとなみなひかりく生さらくさの名やとし
なしあ達は葉の代りあひかなへて又説はかりのえれひよりくき

ともいふ也　――のかぶ草〇孫かくれひらめく宮の神にたすくさけり
さもしもしやえめよけくきのかき草とハ神より
名の抽中時ハ邪神よりてあまたをさ南たりんとまあまたによりてくさ木のそ
もいふとりてしてぬとりやすりありとかく中臣りん　にあくる也
なくむ　まし　くまろる此のむかしへ　又えさくる也
あり又松なとをいふ説もあり
こひしさとなしの――　ゆく字なりて　かよれし――　源氏　行
もいふ同事也
つゆひ――つれなし――　の字なりて同事也　あさとふし――
巳上七とまりと　孫ふし――　こむろの手ふしの　いさてし――　生類
のくさにあくす　孫かしくさとあり　ほふ
くさむくにふ　卯月の――　あまたも来へ　にたよる　一葉――　家ひとよくさ
れあるくさ　やあさかりこそうつふ　ちぶ朝に生て
夕にちかむくさとよるき抽にさりわたくしかいりえ此後にりて夕　夕顔
みれひて名にちかむとふ葉うにしんやりうきあやまりや
一家葉と同葉や蕎孫葉とも
うけとこまも同事也
し――　ちくさくのとかくちつも色
是りしけむそ
此色しよしよとふく　めさまし――
〇あろうきのめはまし
見はと是もたふ見れく

ともしてわま　〇うかそてふむへむけれ日うけ草こひのと
とりれてそ　むうけし――　とらも生されてりらひうけ草めりしきのう
他巻ふ　ひぬれし――　是もくさにてあくす女房乃あさ　やふくぬ――
仕す　なれ時のゆてあろふ抽や
〇ゆみ姫のやふく井草の春れらへりり入ま
てやと浅らり此月ほ草りうまとりふみや　孫つこ――　三浦よりあり
すとゑ説あり又孫こ草ともいふ　あまにこ草の
すかつの案をまやくしとや　こなして――あさし――男　国草と
なれものし――　〇たて孫なりてる之抽草へたひよりりまくてふしこは　く
ふくてるさもの草のたひたれハさくうるるるをおしとりふをとれてたね孫
とまくまろくくさるや草あもせとハ國草とりき孫くさりてあくせそしめた
れるを雑抽にそるしとりくみふかれものくさとふくさのあるりさあるす
葉合とそるれものくさしふやふくきの方ふかりくさとうちともれへ不先と
ふく又捨遣ふ〇さくう花わりやとよのこあり也て　山――　もてとふくさく
へろきものくさそれもハあらまし此方のむへりく　ちのねはそ多く
そろぬ　むしろふあるねきそろいゝり　――乃香　茎とうけして世俗ふる
をし――ひし詩うらしりくり　大茾とふ抽え
さくれ――よのつねなそひの木とふく仙とさの中しあさくとよある
あとてハ捨へりる又なふと見うくしふくさとなし　志

わか菜 めさましぐさとも又菜とよりみかしのとふ物とあらそひて
ふハさし所よしよろしく ゆきとそなへさうられすなハちなつしてなつく菜菜と
やまさとのはらくさ 雪間乃わか菜 遊糸の如くくさなきをまつ
あらすや江又手のやう そあらう流なくてとしより了
なまるつみや のけろ ハ あさまもをさとたとも天流也○わかなつむ
すゝ物ともらむもうけろふひとゆ行とゆくりむ ゆ ふもうけろふのもゆらもさ日ふするり
てもゆるともすとあまへ八古人の説やし八雲御説と又万葉ふうけろよの夕
さうられハなをいつらくさなハあらすえ新撰六帖式部すりハなさとんく
くを山夕書の物のうけ給ふみりまりてあられ さらめもなき世すりけて○
うけ給ふあれありやなたやをたのまれぬ世をあさ物のりくそうなしきゝ○世
のなかにありてなきみをうけろふのそれうあらぬうまきそう孫つう○う
けゆふの我身まて世ゆまあるとありて又ちとやくのみあらん○あられ
かれ山物うしみく夕られにあき数すされ物れうけ給ぬ山おとものむ又種
孫を一十たしのやうなりなまへしより

○わか菜 二

よりあ菜つむ りんて をはまてつむ又うきなたとうてもつむやわ子の
日又正月七日の物く十二種なとをあり七種をうれ二よ

つりやわのかしらそ子日なくぬ文四十欧时まとみしなら又拾元妙り天
暦四年二月廿五日ゆ花亦子朝臣かゝるとそまつれらる季弥王記ふ見えし
たてまつり時を正月まうさしすなり 河上ふあるゆかり孫 万まう
そりかゆひもかゝすの肉や ありをとたつ ○かよつうのを
是わり わかれゆるま みかあしろや おもれつむ をちなつとけ
なや
まかし山のこのめをれさめゆるくかうらん○かくみちまとのれたきつ
すまでのくのかりすの数やきさらんをちなつむとのひてかりすしとあ
はもありて又よすれぬ 千代菜草 ○かうくまもすあやつむ孫くむ千代
をありて若菜といくや なくさくつきのた孫の数をゆうすへて
あまかりやの天名や飛むまあり松千 りしくつまんかゝな
代名氏ふの手まの手み了まきあれつう

ぬ物をわりの なりをそしりれ人をつむやゝ わりなふすゝ つむひせ
ちやや
ぬ物もわりなにかたもちら 雪へ乃わかれの菜
な草ゆ夜むけな 七の菜をは 十二種 若菜 葛草 あ
つりつく さ
ちくをけ 芥 ゆ参 河蓮 うなつら せらひ 葵
つしきを文 ゆ玄 芝 薮 小大根 七種 すずな すゝへ

れうきやう 法形、邪苦也
をしたる 佛乃たい上

○菫菜 之

すみれつむ 野ゝ又あれたる所につむよしあり 法ゝつむまゝみれ しくさ すみれ

しくさ 法乃おもしるまのし 一夜草 すみれ異名也〇 一よくさ菫菜也

しはくれなゐ色の花とかもあるは今もつむなりしん野へれむかしれ物語云
むかしあら人みちをゆくにまよひくひろ野に日もくらしてくさ乃中にて
ねるのうひことひろひぬあまたと袖に入れくさの枕をひきむすひてぬれは
八野ふかき畢ゆめよみうやうひろひつみかりひこん 前生の子やこの野らよう
つむへきよしこそゆめさめぬゆめのしくやかくうつむを法おしたみくう
よ菜一ありくさ不むしされのそみされぬいさのをこれまこととらし菘也

うり 一紫菜 〇いのちをやりけてれしまん一もくさ月うやむのさう
あり むらさかく野ふきよひて知らし又この中めみ法やう我れ
とくの野色のくさうけよありけるうくてみくらさうんの野をゆく所
うりまよひりしめりうよみるのうひこありあまとうてうへまて法すみ
きのすこようつむこのすみれとくこひけまともりかみくし よきてよ
おくひよりえ法しそと此二代そんりつまも同法やうまも十しなまいへ

菘也 まさ あしたの田乃くろにし法む
ちく

○芹 口

せつの異名やみな蔞とくさくるくちしともあり同るむすくうまさ
くさの名色にあらくえ又云人のくふ菜やとのへり又情れ仲文もと
色にもとうこ海うすつうりてゆく色この身まをつうしふるよくもそこの尺
ためそむし〇むかしあうき名のつこためそいしーみ色をつてあらふ弥せ
星う又いー尺八宝海うる矢田とらく断矢田やと云細く紅筒ともむへしお
の字とらくしく尺登笛もさ尺能あちう笛折乃抱やとそし此有首の招も色
こも芹 蒔芹 みつのし 型し 根白草 〇せこうくろ後とて元よき
同り ろ孫くさうむわり油ても香てし
あやはこせつの異名や菘也みるみをこひのむすもよあり自孫ありものう
うかりねるやあまよつみ説もあり〇をうつくしむかしーの人もかうこと
やむよとのさうかをきうりくん色に説あまとる投献芹を后に云博物記曰宋
二日丈ありうりう日にさうそうへつみくる代つきをりてしく日のあらく
うなうるとたる つる人あまをを法こと たーかりきこみてまう法をのは
ちたあや気美とよみかんつまの云むかーきのをやめくあきしとるく色
のありあまをうれさとの抑さまよそしまつれさとの抑さみあてはうしまし
てわらみさくもこれをうしきこの人まんちうよくひろりくりくあまき

此方ハわかむかしよりもひていよるとこそしりきぬるをとらしみくさめ
侍なりくへしむ名我につく名書に於井をしやかな文字へとかひひりひ呂
物語にくの中ハあしのくのうちやとれかりたりさなりしつや翔ちによめてゐる
物乃ままをも思ひそれをりふ風乃ことをとあきあをさらにろうまきさ
きの物めしかりのまゆせまとこゆら物とあしいろうと見てて人々まいらす御思ひ
まほりてうせめらせや御まをいりくれし御ともとくせまとつもてくとくまつ
くれともうさのもこふりひらせまてふけまそれくちりひをましくらくふ
せまをつ見てありけにさりつ勢そらよくも努なしそしらりうれうはせあ
のもと宮のみ岸よ旅て侍りつうは山をれ語をしらりを見あしめしてあそれ
うし勢ほさひてわきしうせまをとらひてさら抱ふるえしされしやうよあれ
ゆきとも乃施て女官なを書にめしてあそれりせさせ給ふもききされならのの
まされともやけ侍ともし奥義抄よりもしくむかし大和国ふたけきものあり
けまき家よりを山をつ大池をありていえしまるとつくせまけまいちるれやもめ
此子すらけ侍りしもののまふくさ丸とらひけれありきまるけのあとらまいりく
かそせまとつ見けに侍る猛ものよい般若出くあらひけ侍とこそまことの
まらもくおやけるれむをつきくやさひまうりてられまをなくみせまけき
を母あやむまてゆくをあふらふとひけれハ生しも此ようしをとく侍るを
るまてあへてあるうなしわしりうすれまんまをりけく程ふりりしも又やさ
ひふふし又も時よらの家の女房は物みるのやとまふまりれれおふさとま
のもの為こみせ侍をとてあやしみてしまかれふすのらさせ給病うてあ
らすまりくれすれ侍をおりひろりけくふよりて物やすたまんとまろや
ふ女房あられまそてはふりしをひめきとるくれひめ子つえあられうまそやと
きるく座さひをやめよといひけきそりちく物たやもしこまりてろ
こひて物まて抱らひなとしてきいのしく不敵ぬひめ君いりもくしのひて
みなしうよきせんよみりくさらしんくられしーまをならふるーまらそ
るよろあひて一二日よかりひつみまふわりちくハ志すんるとをしーその
ち師るりもさくせまてへまよ文字をりちらんまろし学向すへしーま
らもこくりし法師よかりへし別まるりぬ又ふられすとるき法師のちり侍る
らハ又りくをんして物みあり程まるすりぬ又ふものひてりようんふま
むあやしーし経大般若まるしむへーーいのまをせかそれ程まりてかさむと
りふふまさりひてうこつみふるとりさしう法師せよ護身なくまろやうよ
てちりつくへしーしハへハ又修行ふ伊てらう法師君あもしれひて夜もりさ
と洞しそとしを赤裃をもおつりぬりれあまとさそ修行志あらく程了般
おりれおけれハそのようしをきしてをむをれおしてひらへまあくらくを孫
りひてありとれひもりまそうせぬ弟子せ後のるすふ行基菩薩とよつ孫帥る
うけよらに乳盤よのぎりまてりそくまふるさ丸ら若裃わまそぬい志行裃こ
りひてりれうらてしまるをりそくをりぬ弟子あやしみくとひけれハさこ
もや智をも女往者よくまうんありし志抱のもうかりまよの中よとしし志
やくしくあくたうふゆんとせもりし我方便してくまあしらくりれれ
侍くとすんありりりひめ志をね基か侍つの化身行基文殊やまふくた丸ハ

智足や智足れ足とて往生するものハあさやとうこれハ河中抄説く

ひく若こしかりしあ
ゆくさきのよめなきあおくされたるのちるけ
せきり氷田乃あせよひくし色くのかりまゆく
れしみなのなつそい色なき　源氏

○蕨　五　伯夷之れ山中食すわらひや周王ゐの粟とて不食とうと

おりわらむさし下しおれ　又王こハ冊器聖主日聖娘ちのすそ野ホもむ祉の所くまと
むへゆむ　源氏さまらひの巻よりいくり○若うけや抑ろい　ましろの下まらひ祈めりしとひとそつよれり
ましろ之一流二うく　時すしねわらひとなし　むしさそのちりわらし

六　山孫草　○やまみくされつるて山ちの物くさや家つとへてとま　あやきうさえるうし美名く蔬王ありあり

きうなと伊勢まつけれわらひゆくうくて

おひのう色れゆし　孔昭うつく久さうひのうるのさまらひとんつの国ありてとのさうひまさうこしいふ不
あり皆水とうけてきしこまりしもいてぬなりるゆくりさうとりとらんと
皆名の物神とや神れりひ以名の岩のうくによれちうくれへいそうくくる
えとらんしやうれうこれとうくとそうえのとて伊へハ毛聖ありさまらひ出る
之又聖まてすうを花不しよめし出花さうえのうる色れさわりひとんすてむ
とうし暑武をうるひなとうい
然もあり不可用てや　ゆかりとあせしちらし

○土筆　六

筆花花　異名之ちのやけ聖りしとらし　ゆくくとほよあなま　○くく山の志つのこうてま
生ふるりをもふまりるのつくくしうふ○さふひめのそてしそみう
つくくし　富うささふ州志のけしあり

○藤　七　枝象とももううあり

ゆきしうきん藤らしかりし　たこの　らしく　ーのうろそしなき汝
河うすく又爲汝ときくい
みおつくうとより

しつうしめしけとゆかりなし

花そねましくもみちの（しと八雲御抄に注や）時ならぬし（秋れにちく）おとく天をあふく
きみかれ世のちよにけりな（うましかたにのくらにう の代さてしこそ）松よかくは常
ときはなる色の恵みも 雲かりみさるとも
紫なる由縁や 二季草（異名や ○ときはなるむらさきやふ これ草松よのこれたりかはなれん）
藤むよ むらさき草（○松かえのきらをもちとりうつくろ むらさき草の文れてこさよ藤むにあり）松見
あり
草（○そよやうかにかりあふ松をくれよけ こ松見草ともそふさえによりけり藤むか）露のちれきひ波とて
まよ 藤の花とよあり 色ちり乃きれひ きよ木
あきらのしれちれ たかあしのしのかきの
ひとさん 波ときうさ花くいも孫松

○数冬 八

やさしみえ やさし野色のし（○山ふきのきえさらのへのつ か方まきとよあり和山庭種）
まとよあり さしのしいもよさら草とよあり しも見
なりぬ物あらまし いをぬ名かかく花と讀り
おもうけ草（異名や○ふうかよのおもうけ草の由ふを 鏡草 同異名之 ゐやとよめしうし見れかこうあらまし）
○おも瓶とうひかりとめしらくこ草かきれころものかこうあるまし
此目録よすれきぬの抱くこりと云抱かありもうしやまとの国からそうて
こ所よあるわとこ玉戸ちろ井手の傍とかをむ女かり山ひるりさらひの
むさしあさうさうしかたりひのおや志うつそもしめのち抑こ二めよ
りひろろをむさしちん世つてのへ ともに今よりさあ娘すうかふへつくをと
あそひさとかり出をつしてらてかりきの者さようちむのちのとしの玄山
不よると山みえたひろうおとこあられよ抑りひて不断此とよろよひとうす
みくうけさろうおや此るときてひしひてうくみをかり出てとこそてみよろ
むを年の秋又此不ある撲草生出けりても时此れとこさそへ他のむあうくそ
けすまけりとろこ此二の来名又りくまうつまをも桃王にあり
めてよよありま うらひすのきあく しの所えゑ

わくめ色く松の小世帯　浦浪よよありみえうしの汐のたえのうる色すもよめり

○躑躅　九　又くゝつ山まも

白浜くし　さぬ坂山なら勢　なとりまとあり　のちー　岩ー　石浦なとりまも　よめり　山

みそてと紙浜のまで海れいそーいちまのー　岡ー

あさり色のーこー　○あさうしぬ色ひとへてうあーしうち　なきくのいろいこうてーしのさる　夕ー

ゆめー花ー　みいはくし花ともいうり　はくしれ色より　ーいりけたを　○山りけ　よしろ

いりそ去れ父の浜くしーれけたと色浜まふけるま名家云浜くしーのけたと
ゐすあり書よりて浜くしーのあう孫ふあ世え松あとちせ又浜くしーのそ
をといふ城も浜うとうや　岩ー白ふ浜り　ひとり草　其名と○花さけそ秋うくそ松日

とり草みうよとみちの父とす別人を叢むにき　ー此岡　名来やくさりくらく　をろうふと紙よめる　大江のうし

おはくしとよめる　わう庵れ岩ゆうひなる

岩ーうくきーふ孫さしみなすう岩ー　松乃下

ーー草浜えしれいをおうりね浜を岩ー　○りひつ　たひたち

てつくしーをよりそとろ
さーしきのとうり示まそ

○杜若　十

うき浜まてく　うきうをくまありうれ色ふ離名花八雲浜従色　又池沼浮まもとあり万まを秋津野ふよめつき

ーきねふまうる浜市海をおのとりの色うき　万　良吉草　いそし

うおよそふともいふ　あまき
つけのうをや叢むふあり　ーわう袖やもとらむ

○卯花　十一

うつき　卯花山　ー月夜　うのとまのしろきかう月ふ　浜ときく客まもとみせうり　庭のー

袖ー時るあくみをのう色れー　万ふより又孫よもとむへ　示之まくくも岩浜きん○

家持
とも しろくさし 四月 雨也 もよもきかとぢめり 宮乃色
とをむてさけみし 夏宮草 異名 雪見草 ○そしてかり我 袖ぬらし宮之
草なにかう雪よつきく 初見草 ○ころみくさまくさかねまし時鳥かつ
ふまれ八花むみをさき たの山の里にある花なり見草と云夫
名花むにたてしかり口 忘れ草 ○時るさてやさかまし堀見草
季よよつてかから花 むさきにけて山さとのやと是
を花 八重のうれ花もつみうくひをそれかよ
む
かきみれうかそれ あおうのこ家

○葵 十二 ひとむきにみあま 乃川の挿之

あふひ草 とかりもむ みそしあふひ しそおさく りろうつを
ろえ草 二葉草 神山に よめて うさし草 二葉の葉とのひ りしありても
かけ草 是も異名とかうさ物 よありすうし宮嶋 りうくさ ○りうおりひうか つえ花のさしかす

そうく見草とかなかをかくき葉し唐の玉草とこのえそてかく葉をとうてまけ
利中よあふひをはこの見あり崩れすかりてあとるよ王子この葉とくさみ草と
ふ述ととく花む あまをつちあふひすりちえかり葉のすくえよを
にあり組かく 庭草 の葉こともさくみえ葉せりふとみるき物おかくう
りしおひとり色 是るえうう あおひや あふひさうを神山
まく松尾山にを 見あまひくけふふし

○牡丹 十三

ゆりみくさ 異名之○ふちかきハさきそを叉のふうえくさ 廿日
むの乃うらんかりくえてまし花むみき
草このそうのさく日數廿日とうきそて ふとりくさ ○ねろくのむ
さうくし仍号廿日草とや花むかりき なたらやたし
このさ花み時ハとうをすくおそしかしあうめ山花とあひしておやくう
へとみそてひうそひのをふなかめてくし夜をよそをうし風にて損るをとお
けさかりうりてむとこ他のむありとて雅おしくりとうろ花よし実
ひとまてりしのしくすまるとうん仍くさりとらしあまも花むにき
昨夜草 異名 あまを とおつまくさ 日夜白 いろくさ 同さし これハかめ

かう山ぶき花　是一説や伊勢物語のうたなりとあり

○菖蒲　十四

あやめ草　只あやめとばかりもよみ但あやめの名とさり逆後連房と桂くれ海あり但あやめとのみいふこと菖蒲のくきなんよみあへん

八雲御説や　あやめ　あやめ草　五月五日　しのぶれ　節供の

よしの色かな　菖蒲ぶき　あやめをとるへきとなくすちめぬとんくそめるや

しのくさ　拾遣　袖のうへ色ふね　さしとくめよし　菖蒲

草花かりぬく　万　同くれぬ下より　節供もし　やや

かりのさいる花のし

○瞿麦　十五

とこなつ　万葉ときとなつなと四時数とくけるも秋の七種のうちなり八重なとはます　もあめとこ

つこれへすまよしのす　ここすくくそ書之　かなしこ　めうしや　まとしの

けしし乃花ちりうさ　ももゝかの乃ちばまたあしすとかめるく菊もと花は時へちらぬ種さへうるはしやと

伊つる定やうなく　ともめこの名まひ乃小かひ小すると

色うまよしれうしく　めの名くうか　一のとのしう色て　庭れとと夏

させゆひく花をそろめ乃いろ　山のつ乃うつ

かふさけ氷うめくかてして　むうひ乃野色

の一日暮しくさ　なでしこの是名くなく但めしんとそく　石竹　○うしのこ　国ふあ

いさきすあつまのおくうれふろいしたけ右書き後執そやあるひそ石

の升との宇ありてもいくり夫へめく字ありそそくは家のむそむりし

ある国ふる内の時主とゐようしありけの家のうしろの山よ一乃石あり

よの名世土まいありて人をるやますかの時主くさんの伊しとゆれすかう

あち夫まちり畢夫ぬけそしてむされ畢此花かてしこやあうさなかそさく

ともく荒むりしあり○義さゆる朔れつしの名枯ふ一たるさけるやまとか

てし雪まのいもかにおちかゝるあをしこい　万
さやおちにさく　○りの歌とよさりろみてーこかひもせんゆめや
ゆりさくなりやれちまたけいやれちとん深くにさ
くうかされぬ色をあをしあのされ君かたよ
まくとそする

○百合　十六

さ揺り　たゆり花ともいふ　さゆりの花とも　さーもの花　くさ海りー　みろく　さゆり
せ乃り　光草　ひめゆりの異名や　あまとをかゝれ　見えていつるえりそれまた　すあまへひかり草と　うかりきのをのよそまきまとさりし　云々
万
たー花ゆりを色あまむと　たくも山まさにおく
いそまさーとよあつま　くさら野にゆめーとよ
ゆり　まきさーも海をくいつま江にを　わかせき

かやとのうちうちのさーをされ　万　ー花　新六　たーを

○荷　十七

山谷に蓮生旅泥中不与泥同調とあり　おろかにたまぬと伊つるまねまる　をちをちのをにたゝ家ゆへと　云一説之とある
ー葉ーのつゆ　かに　ーのう葉ーれたちを　この　よの
伊けたとえり　されをちをーのそ家　い堂のーいつま江の
えり　ちをやのをちをを家たく　いとあるのー　○さ　くを
すのいとあるのをちすられ家ぬ　よこうめの夜するやうくらん　ーひとくる　おかてられ
いけのー四文れー　○いろりうえん八のくとくの池にさく　四文れをちすなるひかるとり　ー
をのにこりまさすぬ　ー海めくをうめさうら　世間のかつをん之　水のを家　蓮の　まと
六月之　とまく　たれなー葉　をちすの　見えや　池見草　○いけちらす花やくもらん　いけ足ぐま波まかろをてまき

乗えもつて露恋草 ○みひきはしむやさしくんし露堪草 水恋草 ○
荒む 事乗をうふさりぬされまる荒む むや
はりをほそやえしくん水堪草よ 九条乃まちまち乃み 荒浄 なや
逢色はえしふみ色ろけは荒む
ちむしさし そものまれぞ まちもの(み)ちいつ 孫 え
あまりつく
海田の池をしみしといふ魚ぞ 万 太宅りみちた
はし乃荒 なしけの池の玉のまて玉拾ひまふ
みはちもの乃う気を し乃やや 源氏てちものやとつまうり おとけなとれむなるべし

○夕貝 十八

ゆふかの荒しさけ乱 たそかれ草 是石荒む まもあり
かれま光うへ と たそかれにまうむてさけ、 たそ
抜荒花花 あまりをゆふのかの乃ゐや 海ともまゑてさゑ ○あさてかすしつう ろつおとへよりた

まとされてさく夕のかなれまほうむくよ ○やましろの すゑの赤のき
夕のかれたる
まそも世にゆふのかなれまきりひ、くよもりひくよん 風ハそうしゝて山城によめり
うち地うくくとひるき
こやのそしなれりあまりてのし海し ちふの

○風 十九

山しろのこ海乃うらま海 ○山しろのこ海のやうりのうまつ
よあつま そめくうまふ うりたとまありヌうま海くるとも ○しへうあふそのくうまふの一つら またそのとしなくとまろひあくし 海り
し ○のしし家やくらの海う海のゆりう うれし
まよりまおとらしせつたふうみひく つらこのの名うまや
さそみめ婿しりし ○むもとひをくあとつ
しひのとしてをふし まますしすもみくまね子まし○りりこきのま ○りりやとのませのもさうりとふうまのゑ
ぶつるちよのたるしまもつう
のこおよう風をそうりけき
○ささめたくろうり欲うまのつくこても
さやよりうんこまのまさ物 拾遺 多羽田のさとれしはくまし

○阿知佐井 サ 夫木旅よまも世 陽草くうけるを

あちさゐのもれ やへさく あちさゐの花のよひら とよめり あちさゐ

乃花乃よひらにてる月 よひら よひらもくかけを 技之

つもる ○あちさゐの下てふすさくからさん よひらのうすのそふりとみる

○萩 サ一 野なとよまむ水をうも あさくしとらく

あさく村萩 一原 一のやまけり 庭一つゝ一之 きまさる

一のと風 一のも風 そうくとももまくすひくと

をとめまへ 又かへ草 美名之苑む りふく のせきく草 露忘草 ○

露袖のもやりてん十月一 露やまうさそうめ 山をたりの萩 ○夕暮の山 下萩の山の

のかれ花の袖うもあさ萩う苑むよ ろしよ松あさきますする乃 風わち草 ○そらころりふ我をくれとゝへ

一さひし寸床さ苑むよ あさう田まと風をちくささ とともち

ゆきます 秋の花草 ○秋といへもりのすくす秋をもね花 苑む 草風や夏秋の世免くるうしん苑む とちまし草 ○を

まのうみ袖すりしとりれ草袖よを露をはそふをかり二条院のめさ玄くしと

それ草とよむるりのそやといふ袖そりあまをともれ草と詠せ一れ徳院

家何匠之苑 萩乃花 万之仙彩 ともをまへのをとのたそへ

むよあり 汲下为元

さと讀をまも 条風ふうく てらり 新六 まろやのなりしといものまを 源氏 るや

○萩 サ二

萩のふるえ 孔昭云よろつの草はうまてまよりのそいて花もさく

おふりしふてもめく花なもさしもあらうまをそ木を秀

とひてあふ二ヽと万条よつけ防八是之られと木萩とそ木れ非よりをさり木

萩まま野よのくあると大まこ後恵ヤ一とそのてわかゆま万ふまきを我

家とよめる家みを我やとうきころ被よ中常れたまとことまきと中りうま

と葉れ郭よ入より万あそし海のえきりしともよを住よしのとをとさしと瞳

まそ我ともうきやうくよ万 秋一いやし むうし ふし をう

ようけをまそ碑ふりきろつうしも

一さけ一まさ一のしー めとあしの一 下のあしきや 一說恩千詠山

こゝに又のとありの二えたをとをりかゝしをまやこそかりては むさくとりとあらとひかられ枝より花されてこハくしきや かし
りをと うきしのしーむすーすとよしの花ー
のーふ 志めゆめぬーうたれく秋ーー此気分
くものをはなてかゝくまおふ しけりいまみさく
はなつ日かひ 万花やをとりのはなかなりん
はなと志のかはなてをめくちーの露のまをとさ
とまのかむあひおりふ秋ーはなをしのかむね
ふふちもーちらはなをちりすみてあふお
はなと色ーま 志りのはな 志れひ
そきのすさくしーそきさ ちのもち そきく志りたく草と をり花嫡とをとく さりそゝとのけ ちゝす そや
はくてゝあかゆりしさる花 つまそ気つしまゝりれ文付

又下葉 さかり おもひそよめるは 萩かなしけり 一の下葉
色こそいろいろ風 萩をさや よろこほさく花となく
めでま玉へる草 美なりや花 月見草 萩の字 望守草 同 庭見草
○うき玉あさのかりの庭見草 ○秋ち草そや花かりなる此庭 ほりゝ玉ふらくめらとさよ花む まをとのしの麻をうつゐを かりそ人 丸花む
古枝草 ○さや花のく露も文あるかゝ花ー此秋も花を 咲なり西行ゆこのそきさやきのよおりとゝく花む
いつれかのま 志くまはく一石深草 ○花はけいつれるれ 人もこゝろめ草名ふめ
てふれかや もりあきたつれ○わすれめさしまくのかけえき ふらむ花む へうこゝ花らかはそきのめすまた
花む 玉あり水かけ草とふ 作家らよとう人 西花
水かけ草 ○これもさしかふやかなら也年ことに水かけ草の露 まくこれを見そてきの美める七月十五日此ころ水の露此す
毛乃ちる さつはるとるよかのさけるふとうめるを くけろふとをり色まる 志滴

さされまつさまも拔うそもまつさし出たる拔と云之○秋て いとも葉乃色
をさらりまのしと以へれいたうちを閉て紅色の数める
みちさいたりま ○さいりまよ哀をるめんあめ姫まとうつろひう
た〜しつくろめてをる朧うりもくあき〜し神楽の
さいよりちや大ゆいとゆるそてあうさめりかいちつをきそと云飛さい前やも
つしちきや哀をろめんとい人り又さいらんちいさくあさうし出て紅く里
うちゃもときひ○さきしの来うろ花姫まる秋 志らちに ○ゆり錦し
もきらしたれやう人ろうろ紫つらん しらきとさ紀
ぬ今ようをまれひうりゆうるさちうなと人よ飛明云白く花さやたきのあれ
いうせをよありといりそんもあつうねとあきをあきしきしよむつきて之方
よ向風とうきく阿弥陀風とよありとろと
ろれうしいそく妹ハ五がまを白妙花をまれ乃一原の西りあり
○女郎花 廿三 姫部志姫神あふりをきくまむ野山又沢ふ
生と伊ろり遊ますつりのまく又原ふる
或ハ月よりそれ
とよあり
さくれをとみれへし うしろめくしあとさり色
又おとこ山より
花てうとを
あとをと
里神るひのあゆくさうつのそとみあへし方

ゆきたもと袖とよあまさつろふとをも香ある紀
まり色つま都ひ菜○されりおろさうのくちうの都りひくさわま
るれなくく女郎花いさくうしんゆうわもとおりひをも
さとりあるハさいゆんゆいの葉つくしはゐましより天智天皇菜花あるふ
をまくらきとありみ志をんとをかゆせすまさしし女郎花とも云ひ菜と云るれ
むふあり前載合ふさくめくおく家内海るりさくらうをとを紙目沈吟ハ詠をのとろく麗
きそ白露のをさへようつさきにしし露のをろうめふまう女房花あるまつらりし人あてよ
なおうきくくのつきとよむるのろてをふ白つゆのをまよらめとしかや只ゆ
きまをつきのつきよるをあくもも家るとき 男山ふよめつきをとみれ色
ようりりし来めとりふろうり
しれ一時とく詠る 古との帝よりくり平城天皇の治時小野頼風
指てさうひふりるさしそらよ許妻うひりかにある時京九女れりとよ約て
のりくの佳をうちするすちきりてうんまぬそれくちか女許けまとよ二さり
けれハおとこの八幡の宿ふうしから孫約てとみよ家なるものそうるてか
をくらの袖をしあさら女房のましますふまゆき衣紋おとここよふさか女うらめ
しと思ひて衣をさく沼のきさふゆきそやまふ飛りさいれのをぬとぬきさすてく
かをとすけて志よぬ都とこ紛ろうふ家のをんまの云京乃女房のれりしつる

うかるゝ所ぬと云心にこそあそてくれひ川の小川のりさ小山ゆきうさわのき
ぬあゆりの女のつねにまきて咲きぬえあやしみられを始の中ゆうのみ死て
ありけるにとりあまたく孝養してかの衣ぬをとりて如く里へまうでまあまたを
みられとこ宮仕へつかうりて京にひさしくぬるかりけれはうの衣ぬをみむ
と思ひてとりにやりけれはかの衣ぬつちにおれちくちてをみれてしく
なれるつうひうへ京に云し云けれは秋風ゆきてみるにをうたつしされ
みられより秋風吹のりにへとらんとするまに此花とう見け咲けし末にそこ
そうへなひくれとこ立のけれは又秋くれなき小吹るとのくやとえし又れと
此山にしめつも此後也又く
猶枝とふる上は墓まうりて

いつさ れなしくも花く小

○長月九日するに花壇の露にたとろゝて
さうそこさうをみれつしうに

みん 寄小まつ折くし

しらしもの枝 しるひきかたゆもと聖

○落 廿四 秋の末りけり出ける之

をもれ 花川をもれ 所とりのい所のしもく 花まく天
さまつをとまかとより万や

ちかふまく夫ちよとる
ゆきむりしそう

いやし むし 志乃し
ししすく きのなや
かな出ぬをとふや云

流るうさとそして新六よしみ
海ふまし丸るとそり

一せうし わりむの一むら一 あとし
まく夫せ

志れし 名所の日
落の名や 志みくとし ゆ夫乃をとし すく流 新六
ふを

くろをあらふ志為くもより悲や ある流るゆりしともかまく天に
けふるえをくろれをしきゆるや をるし み云かの出てりさやとさしあを
よるやうなけるをこきをとよりて又云流大落とうけるを此流の字につきくもくす
なきうなけすく きなのすく きと三のやうけよるありを家云もくをく夫となめ
れしれをこきをとふや又なるこすく きとも云元待流抄云伊勢宮にのきふまと
きの志へのかきるをめきてとくの人てわかふにりやをなた落のもた文字年
あのわくりうりよふめい志へ のかきりをとめ天るうわもたたへをこ きとりふ
さしへをん俗にさすんとふや今云もたたへすく きたと云わもたたへとうしと
そはるくみうちなつくまれてるそうしもく夫とも云かうりいてねそ志九
すく夫とりうん日るや只をは落をえたをこ夫とうさ するかつさく旗をりひ
をたるなも云流出来元介にさされ出ぬなとりみそをすく きけそそろへとう
ねよかふいてんとすれんたりふましと袖中にそり をえその栂にお吴まそ
ふとをし出てまひひをう 流るしか と花図 はやのとも云不志か
たりしきともり源氏 かやのし ろまめりら此新よ
あうきく夫とそし又あうき栂にを流射山のまんりしるをくきるそうさとへめ
をはくるか其外人の邑をともまつるの雅を皆落乃かうりてつくるやとえし

まとゐのー　山藤にかけてあまくあらまほしの藤ますかのすくなきと
ときみのさきりとを一万十寸種とかけれはそれ出かへしとみえて一尺はかりあり
ず法之種一尺あはしさをかの藤さん麻の花ささすとれいとあ数種を真
てとはかりとふいとはなのとこれさかやうなるやさもうのすくなきといふ
こかのすゑかくとふせくままれうのすくなきといへあもとしてもと書した
はやきみかさ藤の　蒼菊草　美名之　○かりやとの庭みなれたる　蒼そ　沢
なけりへしとそ　菜かくしよかりかうせやぬくらん　花玉
波菜　○あかうすし風よりはそは波はさく　しつは波菜小宿そこにあく　花玉　みだれ草　あまとも　美名　紬波
草　もも尾　花や　つくくさ　水菜とも又くさといふうさのやうなる人　志日本　記第一曰使山富志掛五百ケ志掛八十の玉籤使野掘
志掛五百箇野篇八十玉籤これは天照大神天の岩戸にこもり給ひし時たこつ
まのうしおそさつんとせしわさ之依之志かの国諸方をはやすの戸
つつまみてすくあとをとりて伯幣とする
やみ三菜かやさきのとふへしとそ　まろくとよせよあめつち　源氏
まきをさかの抱るまことりてとさしまて戸孫くとかり
戸孫くとれかまいてくさねく袖かり給ふしとそ　花しほむ
響のいさやいぬ気　ともみなかりぬとい色つま風は

とりすくろれー　○あそろみくすくろのもこえつのくめいはされ
ちるつむこをそいもゆる乳眼うひさくろのを
まえとくん去れやけみくきてさのすゑのきろちえ衣のしと暑まてとくろと
いつつや万ふ○を出山の世きめてく海よ岩なつむいのりもうひもえしく
とのしも又碁後ゑ○志山のされのとすくろかきまけてつめ出かりふか
は宮そめるあまきえ万ゑもと本まて深まる花すく海とん菜のまくろしとふ
や一万気掛ふされのすくろりしとて不為之と志山乃されのとふまでそ不ふ
て為あるへえもとすくろきをめしまえく海る菜とこいふへきふめの物夫共を
すまみ共くさとものちくふくをく海と伊りん西山治ねと万ゑも作のえ待く
もされ宮をとまてとれとのひさくまえをえ只さしまえとふめりうきまけ
てわうみつむたくとあめるそ却かまさしけまと為きれく菜の枝のく海き
をうきまくへきふこうてみえまく海とんそくこきのふつきくえをえまとふて
のかうきくさのやけてく海けれへきを　おもしまりすゑをとうひの
を海とりふうれこそつのくむうり
し　万　とまれり末れおもひあひ天万さこそへ　○見え戸菜
りりぬうたへ乃志みくをすくきふかま出ぬさを○されへは荻を秋とふり　まりく度
報はをそあり末を秋とおもりん
○蒼草　廿五

浮気草うつろふ草ひくさ 此にて指す 百秋草 此草のしお花の くゆへうつりやすし
わすれ草 是一説之 とろく 鴨頭草 又鷄冠 草とも云 浮気はなさみなるつ
うつ草 万 うつろひやすき うつりやすき 気ともも あさうつひる
くるもれた わすれちの花はいのちとぞ

○蘭 廿六 以香為曲

あちきなの海 後に のく宮比言合に菜むすふ文性をしる まよひくし 凡此指するありとらし ちう
まふよせてよむ めしし ちらぬなとりへりみたり ぬきて指 しなとも又 まつぬきかけしとも 露に
志那莪くなとも らふの花 いはさの山の山
あらき 蘭の字を則あららきとよめり いれさの山に似るや うきふ雲にみち
まる海とよめて わころひめくし 紫此なぞ

めなそらぬ ○うつ家まつのみ白に夜をかさねえちらししらぬちらの あさうつ彩六すりれともなきし○しさ散にまされ色をそえよ と夜ちりまよぬく家のつらましつらん

○刈萱 廿七

うれうや 只うやせ よあり をりなと一束 さまし ねしろ
たのう 只たりや もしつよ 日あし 若りや のすせ しね 是似未定み りやうねせ しりう
ら氣色定なく しりう下氣 しの下とれ 庭乃一束
ねさろしちら 本末なとよ浮 りやりや 霜宮
此あられ くとし折りく里 右家と浮

○桔梗 廿八 物の名によめり和名不重加度くきこう

あうまのひらき 桔梗のまさく りしくさそ 秋ちかう 野を嫩りよけつま

桔梗の花や秋ちりぬらん　一重草　是名や七月の花也○こゝにもとくさとやうの名へもけせ
とくしてよめるに　たにや一もと草とやうの名へもけせ

○龍膽　廿九　此の名はよあり和名は多都の伊久佐

えやみ草　おもひくさ　[illegible]一説にみてしこともいふとも[illegible]
[illegible]くりきこ戸へみり従もくしく女郎
むかしもゝくり松云　下葉は花とこそみれきしもやまうり
家椿よろつへかへし
時平家合によめり花もつゝんたりしはすゝきとそ○秋の野の[illegible]まし
てさく花の色はやこひしんおもふとをすゝの花とましてみ花はくとりける
をつゝんたり　りうたん　苦膽とつゝんたりの一名
のやすくとうく

○紫苑　卅　和名は比都之久佐

おにのしこ草　あまたうはさ枯て乃低ありしをさんすてゝみしと云説
もあり○わすれ草ひとのしたひをおつけされとそよの
しこ草しうらしありけれおにのしこ草とんおの葉の是名にあらをとすま
くさとは長憂草といひてうまへとまをおく葉なれは[illegible]
れんまきの人をまをまつんわうりかひをみつけされとみちよわかれ
ますしまを忘草とも云名はさしてそのひたまるを[illegible]

れは此わすれ草とそれおのしこ草くなりとも云ひそれはまゝくうのれ[illegible]
まをあうをまれしらぬしをや是し[illegible]洞之日本記
一云不須胃汗鐵之国と云ふ又云凶とも云字をも忘ことよあり無名抄云とよ
のしこくさと云をむかし人のおや子二人をさりけるにおやうせよりて後こ
ひうすむるうしとみまても忘れくるなしむかしはうをりう人ともう
よおさめけまをあひし兄たひしとり兄弟まうろくし[illegible]のりとおわむ
うひてなきくをたうしそわうえりあうまへともるけさりきさうおや
なしとおもうひていうん枯よりひ[illegible]人まけてあみのそのこやうくみ
年月つもりておやむけよつのへるくくしとうるうみうにたん[illegible]きるすせ
ありてをひるうやうくしそてハおりひたくさしへきやうをたしをきくさ
しうんのおもひをんわするをまくうて萱草とうれつうのかとりようんつを
後まつねまきて例のつうく墓にいかとさそひけまかさりかうよ数て具
とけの兄歎うけて此身のしうしとおもひて此人をなやよりそうくつそ
日をくうしまとあしつれわまを忘やさしくそしをとむとの上草をそむよ
おなゆうすハ王すれをされとてしをむとちうのかとうおさんくてこれを
のよくまをれくるなくて日とるそさいのとありきうるをみくてうのうら
みよしありて秋をそこうのれやれうし孫とかりうれよや孫うまくそれそ所
れるすなうれこゝとさとらんと云けれハをうまおうきくたりけれハ家みぞ
れやみうあるしし年月をとくろともうくるす　みしあよのぬしんれみ
しくうひうみしみくみもしりくし　おもひまちまくさをとうるでもしうしと

えこそこおそ志をむとうんてうれ志らしとえこうえむさしわんころう
てあられふとしろもくあうし寺我思のかこちとしられ廿抄とさしらず
ありえしむ所あしく義ところてもあさむといひて面をぬその後日のうち
はあうつかるをゆめみるる日としてれころりしあまとさけむ志を
むとそう道志ここてあしむ人こ家へのうゐてつ孫よみろへかへむるけ
あしむ人ハうぬつしもしや又八雲御説よ所しをまよらむすりとこし志
紫野に思乃志と菜とよめる ○秋かてよ又うき露ハとえ しうとわのせしされよむ
ええこ小系是平时云云会之せしさえたしおようて入むあるへかむ

○槿 廿一

朝かほ 朝かほさく花や ○あさかほを朝露ときてゐるとハるをゆふかけ
小こそされ卯さすけ遣とりふえくさるさうる日すしハ花ゐ花さ
きまさ丸条あつ 夕のあまさぬなしの色を人のかれ
と八雲御説
又よするや花くりめ草 夫名之花 玉よあり 夕かけ草 ○あさよそこし
朝の花のさくなしもし夕 とほそはかくる うきおふうく候とも○
かけ草と候うかよらん あさうさハちうしけ
なう朝かほのかけ草うもみしてみるかる 花玉

○菊 廿二 仙翁花れハ酌下流ちしせをみるや

白菊 やしーむしーむのむしーし ○うつろひく庭れかし
ろき秘事のかすしいろ
なうむのむしーえく此歌ハ大貫家又基方む村とふ示を家忠朝臣のよめるや
されとむむしーこむ示のきくとむのむらえをよんよめるや うちまう世てを
むのむらの気くこそよむるか山大貫家れ歌ともさうる世つえの才十二
巻とむのむらきくのまさとまつけ是をうくは山ふすしそむをかしろ泪や
むらきくもむらもくさなしのやうおゆめでと来の人
ようあくれよりひかりすやとたつへしと油中抄よあり 一りとし そ
うし
一説兼和菊黄菊や兼和のみうしえなる只とへ兼和又とらへ ○おの
の海阿池へまさけれそうきくとちうえさしれのえのてころさ
そうえくとも一本きくとふ是あ説く志うとはしたもとのまろ枝とりるて
とへ見さしたし下枝にてころさるてうころしとむとしとふしと又同云兼和の
みうく一本きくとこのこ詠人ゆろりよりて一本きくとふとりくりちうま
とも花不て用えし又八雲御抄云後秋ハそりひとのよやうこしとふし同よふ
御の所まそうひとこされえくしふし
そうひよんすちりひありとあり わそれめー 後れ基後雅之九番 向之但心でおふに

たとへはしす菊の花をもられ姿さへ湯おかさりの池逢坂関いせのあしろ
の浜紫野大井のとなせたきのしほみち井の上の菊合みな不被定尓やと
きく　しの宿わきてみなことこ子世をこめへし　為わかれ寿　いのちのはす
はし幸　流抄く　滴り草　異名也○すくらきの万代まてうつ滴をうけくさき咲ひ　くたはをうへしきくや菊といひて祢とも
まかりみとよむ　常れ　ろく　花ようちらぬねけくうれめや
なしうちくめとふハちりそこあつすたふむしとどちらめしよめうくさそて
花ようちらぬもねうれしとよめれハ経君うつ泳ひしかめつ物くとえし
同云うへしうるを
とよめり至黙や
りとのとうあやまられけり　○花見ゆく人まつ時を白くれ袖
芝ハ陶潜と云人九月九日けり　なくてさく雑尓きくをとりてあ
そひてれれり王佐とゐんのつりひしろなころぬきさ至しうそめ尓さけ
とゆれてゐてきりしるやたろたるの袖入りあやまつと作るあまきへた
庭に見くとつへしうり白と云郡よも毛宝亀悔て塞宗送王告使を瓶を前と池れ
をたつしふくときてゆるよ又さしくもてしより陶潜菊をのりとりて冷然
としそねるるよ王告ぅ使の白衣まてきてけりるると忘て花見ゆく人侍时
やさしき少くのゆうつ白妙の袖よあやまつしとらそく　よあくたろくしわきたし守

見ゆくえきくのむとえてろく白たへのそてよ人たろなき衣のそてやとえし
彼陶潜を書とこのミ酒とのミてえくと龍門に五なの柳をうへて隠居す仍
五柳先生と　百夜草　○名よしれふれさんたり庭のりくよ草なさえてえそた
とえし　ろたへにたれやよしの国見王のさとよ老翁ありうの
庭よ一なきくをうへて此れさまをそてあうひうり此きく秋冬もえて去衣まして
をむ○其をえしもその者みしんよそくりしくらね室よ白七月毎夜
菊の下露をとうつ王物くうくるる百夜や毎月比花とするを
依之四季よりくれを仍百夜草とうへをとえし蕣玉うり　契草　異名　是も
く蕣陸国よ見ま有るもの世よあり王ひて弟をつくしなけろうれひ尓名
残とれしみりう时あよ庭あの菊と一なと二よ年りて去りしんまりは
そうひ尓此草をみそなくさむへしと云ろり弟孫世へもちて下向して此き
くをうるをけて此きく二尓わかしましよいうもうさそうりよ蕣されなうと
きん　契草　○めうきせすりけも見まくれうくこみ草なれしをあ秋
蕣玉　とれりよあうりよ此きくハ奥列よ新妻里よあり目録
世常や新妻とりふ物うきま尓ありすうりひら池や蕣玉のむさし
うりよぶ云是をきくとぶよつきく秋の部尓被入たりの梅語よ尓十月中五日
此しあり然冬を　初見草　冬菊く○附尓みうり庭よりふしもろつ見草なた
のすくえとえし　されよけつ王翁やをくらん此もつ見草よ観ゑまた
南ハきく草又ハ雪とんもより○とれるりへとを山松よまつみ草さそすや日うけ
とえりうとれもりん蓮の家やうへ宮と尓こしより又○衣の雅よ菝のまた

拔や紬又草のりしこし秋の夕ものくらきを是
を実草とゆきしより此政るや花ぞかり　あり　露つき草　あを道も名菊之　○ゆく
露つき草うきなり門と　代へし松の木かけの
されもさしけり花也　星つき草　秋菊くゝ　○庭蒲よさしてふ夕や折しこ芝ま
うしして夫名をうけても折しよるきくよむや雲の　みゆきくこみつ浪捕りもあく
うへまそみつきくもあまつ折しとそのあり花也　秋金草　○花ちりて
それ名のつりよ秋無草そくさ　うつろひ菊　花也　のあり草　月　秋乃花
あさこりりそ朔の露たき花也
こまえかくのすゝとみつき物ふあうりつく　金草　東のくへ河内国よあをの
ふきん出あのてひよふりて八花　東の名うしたよ東のてへれこ
う孫草こまきこうつ気の数よ　きとめ花　秋菊　山れ菊　月　长月花　月
つきましみうれ抱りあを
いふて菊　○長月の九日ふさくりふてくさ　秋きく此花　○あさ
花を露へ　まそ万代そへん　ちぬる
まし秋草とも拔まて昨よのこうけを秋きく此花こま
ふうき抱ふあつまあう流菊の字と秋きくとむ　筆は也　重陽のす
つらくるを壽命なりきなや长月　やきくと
の九日しらうつむきくしらあり　此の月のあ　ぬりよ法也
八重乃きくし　○れひのよよう気しきうぬ気くをきとうつろふ
うろとをけるとみよ気くそきやくらうれ東さされ

ともむのよよう気しし気うめにふいくふきかうれきくたりをうくうつろふ戸
しそ叙花後め山れりまれてぬうしくう気しとのこ気くハいうくう
つろハきうん　山姥のし　ありきりおく花　気くゝ
とよめう之　後撰　志
はくえそとよきひぬよふてよ花　さなりまうきの
きく乃法とりもふ　筆此気せ　わく

○葛　廿三

まくす　まくすり　夕し　し花　し気　えれのく　こうつろ　さよ
茶とも　すはとも
し　又せくさふ　玉まくし　六月　之　しのうつ風うみさるや　みさふし
くまくとも
うゆ気　田し　万田菖東日とより　名付とりくり　風乃吹うり　もの人　てぬすをおきうみよ
之　まきつりる　のりかりのし　吹風よ　気色正夜をまし　乃菊　めくうつ
之　きうり

○蔦　廿四　和名よをほやとより

はたのうへ　をみなへし　れのまへ業　いなばの　し
の露業　まとのりしつたのりみち　ようきさうけつしよりし　をみ新　文あつしの清らの秋　末氣ありくらの
とあめりし　れ文　松におれ　とよみつ　又〇秋の　冬ありま
くれぬ松もなりつ里ゑりをみ高あきまさこ
のうへきの山あ道をつくのうや
家の玉うし　里け連花玉　玉のつうへ　をみ木　なとふよありい玉うつらハつたへ　玉とく一切の物とかあさる詞也玉
つしえ又たかりしをも同之　松盆草　異名也　〇慕これを名つ　さえのすつおくさ秋よう

〇仙翁花　又卅四

〇あたの野の紅梅草の花これ人まの心をまつせつうある
万仙翁花の異名

〇夢　廿五　付まさき

ひうきの流り　海さのそし　海さえれし　文をみく　字なく

そ海さえうつ　さ孫し　あふ清う　あうつ月ありて花と八雲雨證
らともまり　山大江　山し　之二連をうしよみりたまされ
のうつらまそうし　をみし　桑根之　さししさ孫うつらをもへう　とこ
らをゆふをとふや　つらとふ悦とあり而八花うつらこ
しゆをし　あ海し　ゆふし　神祇也　ゆふのうつくし　幣ありあつをと
と藻通物かくありよくくてうゑき
くわひし　ゑひし　ゆうされうつ　ちるや海さきの露
涯之とまと
海さきしのみち　しちるし文清く　海のくつ　をみ木
あろ猫ある
おまく　されし　清ねのつくり見る也孫と井と同意也　又あふさうの
のはる孫系つらくよ志くれくくうへのしもうすくい
つくハさ孫うつらは引とうまをけとあとえあつ物なれハうつ
くるまくうともえしぬ物也　又立田旅社まさねうつらをよめり　山清ね
しのこ清る　万さ孫し　そひまとをれて　海さえれ
しのろくのこ清をおちやまとき　岩のとをへ法
玉し　孫うさく　とより　とよ花を末れうけ野かしけ花玉し花

ゑらう孫ぬし王ー

○茅　廿六

浅茅　ーのすれ　あさぢはら　ちたなき

あさぢふ　あさぢいろはく　ーのもち　ーのうゑ

おもりし月　ーかつーかな　ーの宿　ーそう

まどれくーふーうられ　ーさはれや　はなる

あさぢ茅の花いこと云又とも　野山のあさぢ　しきよくろ茅と見し

とふ云月也とふ云説あり　よう抜たあし野山の

あはちん云りそ孫かつまそ孫らいん　おりひ草　あさぢり繕くあり

うつまそとひしとも云わくやとあ字あり　あるひハ今でしこ

とひ又いつまんなうとも云又たなんとも云又外さ庵く小そり　総茅

をさひとも茅の葉も抜なくもなくて一まちく生くる餘会る紀とくふよ

まのとうくも茅も獲くさとりふや弟さるちの數りまてるさもて

しーハ聖法抄かにえしたり

みちさ　ほとりなぬく　たしよのつもれ　みちれたる

これと

草　○云海のふうれくちの景ハふえれいつなぬくへく成そしま

ちう

○蓬　廿七

よもきうう庵　よもきのうまの　かうらしよもきふよ

もき草ーれせ氣　ーのすたうーした

のーあなしとそしあされー

さしもを草

是いうなる

僅そや

根よ生らうさ

あさぢあさ中のよもきの便也又則

あさの中よもきもよめり

りふさのさしも草とひたあちうりーのゆしもくさ也云日

るも但二のさしも草あいよもきふあうとりもかり又云慈

るる又云巫の村よ生ふくもひく又さしも草也云同る也但一説まさはしゃ

草とる云ハ秋の野よおよ又神れりきよおふ執とも云とくもふを付も草共云

ほるぬ浅名の観音乃示現し給へ執法方○うとたれあちあちちうのさ

務をくさわき迷世のなりふあうんうさりハ此法方上下るりけあひても

かしを総共佛の法方なれハやうよう侍らめ君○下つけやたあつのそらの

さしーたくさちのう抑りひよ方をや安くうんしとひ方のこの旬まで下れ

をきをとたもとやまくらんとおもふはこの歌なりかたをまちてもとも 我をたた
おもとあそりけるかやとおもてもあちこちの日うすく又いふなる山はたも
つけにありこの山のはらのさしもなかくれひさらといふ又云い
かきのたけにさく常に花をゆとりてちるをもとしもみしいふもゆられ
をひなよくよめり又云菜ハまたもゆれんかへにあるかやとさく

○芭蕉 卅八 立耳四字とふり蕉也不展待時為芭蕉不耐秋

庭のもせを風吹ままつやかるとよみつま 又風吹けハあさか
やあら共ゆくさ○秋風にあふにもまた世を余のらさ 庭長菜
けれくあるうちもあらぬ世とハたのまや ○かく風の庭や風
わりのとよりしひせうけ庭花 かうん庭見菜半や

○蘆 卅九

やましむくろ 是むをとけして 又むくろ是内にはさく
もいてくあれ 蘆蔵是 取抱之 またらけりけるとよめる
さらむ花
むくろの葉しきふしおひあまるらん 古

しなしの国さしのやとしける蘆のさし
あめてしけれしの八重ひらきし八重と添るし
の門の気のやの風のし

○荊 四十

おもろれのきしのみちよろこ あれさら雨にせるる
卿云 とらく

○長草 四十一

わきまさくさ 普通にきれにありつ俗吉是きしにれある八まとましまき
清捕俗吉のわきさく菜ハ長菜にあるもとのかへりゆく八
云く治疑やあらひむ長菜 とみの江のしこひし すこらしのさしむ
悪者同形共をりゆく にもよてふくに
屋り わきまさく草是花

○悲草 四十二

志のふ草　やまと抄にハ忍草を業平の心へとらん江世わすれくさと
あるに忍ぶをひらかなしのよとしいふ又おの地
ともせれつゆくし忠ハなとなりそれしのやうなる所に乏ふ志のふ葉おさ
りるたゆりけるく○こひしさを何かくかうやの一れふくさきそけさるさ
ほにかそうよりつゝみおゆり出るもりくとあかきのハい
つきへハなたかりつしとこらく又若ハ忍草よ抱忘を書て之をみても付冠よ
をさしけるや是は忍草の一名としすくさこゝに付て用之をめの内へ
坂揖覚之方に○うさすとしらせいかり寂あまそくすしくさのちひ
並ふのうれとしり冠よゆきとなや○こゝすませおとの
めるやのひさしまきあふししふ志のくさそれひろゝ
をみちもといゐかま　みだれとを　いゐかま　のきの
志のふ草　忍草やりおくかうさし　郭公　志のよ
○紫　四十三　元昊りん元とらし　日野又　武蔵野
わかむらさき　こしらとし　此文あるさ　ゆ
ちるころひてよし　しの二をとゆゑ　○むらさきの一もと　なむさしのゝくさ

なれハあふみそれとそ又何むらさきの一もとよのりにく方のくさむらつまし
とらひ之（あまを）一とりしと乏ふてひともとゆへりまゐり又むらさきのゆかり
くもよむ之みなから
ハこれなからや皆之　ゝくとり色かま　ひをくさなりと　ゆかま　さくら
の文　院くおよ　まつり　うく人此衣うむてよ
一の色まの夜　みをりよかりの一乃衣き
をけつしなとよめり　○むらさきハ百くらく并此文なれ
一らま　あつまにむらされをとるをるひ世の花のさかへる分りよるに
之く是たまへ　のうちそ蛙よいてく花をとこそ万のたをそすくあてとらうと
とむすり　よこ野　一の孫まよとらり　一の孫まっま一きまひさ
を物そ
○ね　四十四
未次む花すみもとつむ　まふつまて　ゆりちやさとりふとまふつきくふ
ゆへく　つまいそしくもらいやねもとゝあつけ

くら抱之俗やなさくおつそしとゐ
やおハ姆で出く地と深く
なまし紅 うきとしはふし こし

のちり 世多も見れ代玄 ふさとく人たる しれすゑゆく花 あめりまれた

し花のうしちしほ乃し ○くらくのとまセ乃山也すより くととよきあつとのまさししれ

非 ふよ多色けくきやすし

○藍 四十五

山あゐのうし うらあゐの色也 みれ宗とも のうをとけるはりわの

しかそし見えられふのめしし の花れいろふいく

めやあとしよつもあかふ あゐより いろるや しまさけ しほよつろ

○苔 四十六

はりこけ 是ふ二様あり一うすやさりまこけ一ふをはりまこけや 一よをしつ系り也ようつるうことのことしてや 一よ

八女羅らそつくのこくうそうくろをさら抱之毛詩曰蔦延蘿も う紅葛美未牛よりすゑふことさうのまわてのしれうやとふく し蔦 まさ 松柏

峯よあのしそめさかしとシリ又 こけのむしろとのく字ありても とすそれ山れしの系し乃

見えとり しゆのくしむを いそは なと し乃ゑうひあしの

志のうこさむけし 松の枝ふうくまさら是之はうり二けく又 ふをとるそ神りしそまつ殆抱を一八手むけ

くさとりふつふ 日のき茶 あまえたむけくさと同まやふられ 未よ系く於くきさえとふく くく

やとふそ こけふ生まししつまそまろ先をのやこけのたくひさ 印ふ苔冊石苺之 まとふく是他洋やとくくさ又ふくさんとふて茶ふまさ一説とく 苔

の土はく 岩のうし生 松さく於岩の之さ波乃

孫のくしふむすしのみきれ 岩のう色れし

○芝 四十七

みのしもしふ切し 内裏より みちれし草しのよ 望

色の一くさ　一くさ色　○こ海をすつのへのうかひよ芝〱へなりき目くゝす近の(?)くさめ

生なから生　一かうきみとり

○葦　四十八　よしともいふ伊勢にて浜荻ともいふ

あし孫あふ　あし孫りふう又ともあらうふとくいぬ戸なとの杉かよとえふる水之とをと　あふ一一乃

葉一の霜のれ　又冬の連ともいふ　間　なりのれ一けのくむ一

一のみる孫一乃うれ葉一乃わりの清一のかむけ

一乃中なり一乃一けん一のかにこゝ連一志れ

連一　又志なれ行しとも　志れ一なの在一けゝ一清乃　都諸よ海の

中ふあしのつれくこころやうふ仏物か来あしのよの中よ

や是をそ菩薩と申之是ハ大日如来の印文やうらやうの様よそ

ありけとよくうときもの之御連てあしつて戸ちりしとも思

おく花へとそてもわのむかるなしとありひとこ連とも云

とふかゝそ冬あしのきこえしまゝ

ありあま連行しのちかさ

まそであつまける　玉江丸一　一のつま　六月

のゝ玉江乃一　玉江乃一かし花　夏のうま

　たま枝之江なおもと位寺江多詠とうく

表うりふらあしさこ連入りつきく英俊わかり○夜米

まの玉江のあしをみくそくさきわりぬ付るる夕ら更

うう花名ハ胡国へうつうそのうそきくへゆくらしとみるか此国の本国より

とすわて夜ハちはれちてあしの中よりもあうとや志のり只か玉江も越前ふ

あれ冬りのさとりとや志のうとこ戸江の玉江とも伊へをうりくの江を

と玉江とふてわむかふとゆへとも其のとい一所の名なれとあ氏つのとの

なとにへれにうてのとくのむれのあ名判りうりもなとく字連と文のま

とあらうすうれ名とい説ありおて用む連ぬ所とりのすうろそる花く

ふそ美むさ連のそわり　よきめの羽なとぬけてさしぬむ花かえしかれも同た

たぬむしてみふ玉江とかこと王枝とふ紙とありこれりしわとこ之又うま

とこるをおつの志うをとうさ越おふ玉江とへ湖と紙くひろうくうりてあら

りあしれひとりうれよ志りをうま杉うしてしまつき人あんをさくまうり

てむ連井死るうんとすかほつらふとや是とを不て用さしちつうつまきるあし

や執念とをうれつりむうへて多やとうく八和云歌説すとをつらまもうこと云

玉江のく　あしのわりのまのちいよく　氷室草　○かゆるりまくあし中

りくつのくむとをむや冬むりふこうろひむろまよ

よのためしなのりて　もりかし読む
しけ気ぬ　ともよや　わりにそ草　ゆく達　あしの志ら浪
みしらぬあしのかりねさへ　うのれ楽し
のれ遊　老し　おもしろくうき住むし　あくそ
うしこそし浪たふ　うくまあゐのあそくたふし

○濱木綿　四十九

うらのも海ゆふ　三くまのゝ浦ありは見くさのたえ志摩国也　大伴の
大饗の時を　海の国より献ずるを旧例とす　是
をはまゆふと　結びあしを　こうむ　浜ゆふは芭蕉に似たる艸の
うへのうとく　あやくのさるれそ　りしるをとよめるも同後也　又浜達にけさ
う文を書て人の方へ遣るによせる　共人まろしとや　又云浜達にこ
ひし人の名をのこさく枕の下におきてぬれども　すずみくとや　此見え
されも伊勢とくひ説もあり行　まし紀州よるあうるとしまし
おりつ　八重ともよめる　見く海みくらうの　しのかさぬる数

○菱　五十　八雲御説よもうまりもこ同池の様よみしかり

海菱いもしこへいそしもへ白し浪しつしこら海
しある季れしんろふし吹く海し　見えうしのよあら殊え　見くさの賞共ふり
志やし　並小あろや　見えし楽し　是そうさかぬ小菱や見えしやり　のよあうとふく菱玉ありあり　孫
やもしてし　これは孫やくこすけ花孫やうらこすけとなそ孫ゑを
らうなるとふやうこふれひくるりの孫をわかさく
うひて盆りうなるとふく○うふりうのねやちら
こすけあまくあま達を志をまするもわま達ますまめや　みるそこし　りそをか　気抱ふ
あり　ろ見わこし　あさちの　よそ　あしの中なる玉こし
山し　みり生よ生みえすうまとふり花のみさえてと　ふ又但ふれれともりくりさしふこともあるこ　やさ志ろの
いり見のこし志けのやのこし　或もたつのやと　のゝ字を入ても　ゆり
ぬのし　二達　りら　もろの山　なりう気物こ○行く山のきうけゐ志の可小　海雲とよめるすうの孫志の気とは案顔云

陵之歴之とふく陵者歴とへ古のすけの家にありしむかしのむかしてさてみちを
始とひとみちをとおほむすらんふ茶陣経不ね侵猿とりふ文もりれもし
れくとらいそうるときこしし史記曰炎帝欲侵凌諸侯ふし是もとうおと宮也侵
茲蓋なし云之云にてつきくきくうすむく又云しのくいよくそきむく是
りそ陵をとゆりかうふりたくろもえ之とうくめ人をくろてく心物と志
のふより由あれとも名をしれかとし云へともふゆれさうまし之古き事
のうつえ
さるや

まろし志て孫併ちそ志かれ入江の志のひ

しあそしなくてしまろこしあしうまのまくの

新六 小山
こしのすり枕あくゑのこしとうけれこし

うけのとうけのこと
けとも作りけさり

うきのまぬふ草とよみるし 山河れを

うきまおる河山し ことけにおふれ とへ河陰ふ生之 志清るろあしさ

しよれきよきこ河原 きよき河原なり 名所之 さしうく志のあの

すまいめし孫し大君の清道ふぬるるあるし海し

万○古山の岩ねにおふ河すうのねのね

しの縁しいはをころ もこ河くまゆうをく志了宮

見えさしいゆくく菊あるし 万

○薦 五十一

あまこも
草とも
さあをし三しすしすうしとふのまうし 古説あ つま子海 乱抱

まあこさるや又ハみちのくれとふとひ而とよりと八雲作
説まありもうるとく伊へともさしとふまあえさうとす用之 のうるし之

奥州ようハ、らやとよく
のいくし 又八茶つくく草花つふ之 花の汝く をとまるしさくさそ
おれゆくむうつくと

よりそそ中臣ゆる家指之遺さ北陸奥作すみ之あしねもひろともしけきそ
見るゆや又うつくとやあきうのぬきようくさ作色ききと云説ありみて用やりつく
まもよあり わうし海しうれ これまろ よしれゆし紫 あまき さこ
さ六月之

ものすえさここよの こ海こちの
紫まそるし こ海るすや
ち一みふわうこ らうこ海 弟こをすわこ海ろうろく
さるや鳴とりうりうけを
あらとよう源之 みしさ江の玉もろしはう孫もあく

もりまそこかと　○みくふ文江のかくてもりかねてむかてよゐる　五月雨の比○風むかふを船のかこもいそかつ
きよそ花かく世ハもぬへし

○萍　五十二

五月乃うき草といゑうき　たゞよふ　五月の物花位暦すゞ三　月生と注すめりとらく
しといゑうき　なかれ物くさ　うき草　そらなる浮世とたえしもう
といゑうき　物くさ草　天名之○波なくハなましかりまうしく又　草こかりのあとの波のものの名義玉位同志
名もかりうき草浮世かく
浮世しとくめぬ　水の都も不浮世てまう　たゞ津勢より
き草　浮世とちれまさるーひさし渡き

○藻　五十三

いはりの花　河上のかりもののもと伊勢より　それもさともらや　おきつ藻　河ー
玉ー　むかしもかうまししくとよめり是不作さ其代あり歌ハもをとりくうといふ説ありうきても玉を刈食とうけ取不まさてりもむとおり又ゑたくいへをもとりしなしはのさうちのまとも玉いのまもまろーむもを茅まーしとさしむやく文字をたすけしてそえとらく　家
ひ玉ーまうー　ちまーのれーや　あまの　さくー　生とあり又すあり
のさのし浮くを　老さらぬのうえ　まくー　是ハもよあしをむまう　志の食物之すくもたく
もひ　りよす
なくも　の河ー　これぬの志て此つく物之　さしのをりあしも花　家浮茅ー　莫告藻とうけ里志りまさこ
よあり
まもとすの里　そなよあり　ーくれみされー　なりれー　玉ーの浮く
ひー玉ー　伊勢物語ひしきもの　よひもえもとらふ物とそ藤尾菜ひもえを六味菜同世俗すそ
ひしえもとらひこまらやちられんひちきのとりふ物とあらとそてひしえもの
まそ袖をつてりそらくさらくしえもの中小ひーきものとらふつえ揺
なしと　河茉莱　其名　玉ーの花　おき乃ーくれ　うち河
らく

にほふ菱　万

〇蓴　五十四　自三月至七月まてあるを菜と一説にもくろめとも云
ぬなはとも
うきぬなは蓴一　根蓴や益池　よしもよめり　広沢の入江によめる
みさびすりておれうきぬ一　沼澤は　よめる　河のなかれに
たきおちなりのれく　蓴ぬなはれはなりける蓴

〇菱　五十五
ひしはる　ひし一れつるさし　すかた又たちもとも　一れうきの　〇ちさひ江のひし　れうきをはうくろへ
てうちたく　やタ末のに　一ともれ　一とく船　一とうのもきつれ　一れ
下蓴　一乃うき流く　とこ一乃すさきびしく　〇ちよ国
のきくの池たるひし一をこ連をつむとやいりのみそてぬれけん〇思うた
めうなかぬの池おひし一とるとりのうめし一そてんぬれなるうき

〇蓼　五十六
うちなてか一一れ蓼　一に花さく　やは一古一
いぬ一水一のはつみふのよふなと　一ぬきは水
一入りうかめなと　は一かるりのうなきやよ
これなるさて　は一れみれ　か一女流く　か一ぬ
はらうし一くのさ　駒をもさめす

〇大根　五十七　〇されまれ中にはそや見りて草やうくみつくともそうへつ
おほね草　はうは是正月一日大内まへとも井のうつよとく大根とと
とく荒玉りあり

〇芋　五十八

しろみ草 露取草 七夕乃手を書にいもの
葉の露をそゝくより いもの露ともそ
らめ皇 いもちろけ
○大豆 五十九
荻白草 ○ひろの肉に宮としてとも荻白草よりうあ此戸も荒のゆふも
へある説まや赤豆とえさんとより大豆之略名むて了名く
もらく説
玉にあり 大豆 二豆九月とく
○大角草 六十
い荊草 ○伊さしくさりのすら風よりひけもろ哉ハさけとも宮
とみそしめろ説玉
○小角草 六十一
莪く理草 ○秋なしそ風のやちろんさして草荒の下枝もたちむ出
月名説玉
○稟 六十二

○春日野よあへ戸ろりせハまつしうふつさくゆうましれをりのろつそく
○ちくやめろ神のやしろれたのてせハ春日のくつよあへ戸りましをと
○あしのうれそこりの山にあへまきて久しんたれ都をあそたくをあやを
○藉 六十三
○みろう出ぬまさへましれひと草の乃をてられを世をやまをきらん
○麦 六十四
むきの時 五月之 し此秋 え了此ふふむきの秋風そらあてとよあり
又そをとむきの秋をとりめろせもり
あとあしふしそむくあうく法文し ○たつのめう名
たつえむえをか
あのきくし
しうねそしよひのやすらん五月名の比後名禄院作
名りさつえむきとハ一度作きさるむきのことすり
○たねまきし一本の下むきのなろり そともの一 ○うりをみのそ
出そ風よ秋あろ山をされのえ とものむきもく
ちゆらんかをつえひ しれ ○山りつのりくよりりかすむきの何のく
さもえそぬ五月名 たけて抽をたのふころりき

○麻 六十五 麻蕡と和名に阿佐の波奈

あさて あさと はくし あさの名とみえあさその中にさくるあさとなく又云くさあさやうまにさ文字をそへさるをくしはあさしくるくらの誤や是をもぬのにをれるをあさとなり 然共あさ此名や

六月祓のぬさやあさのゆ ふりひく あさ又麻そひくうなりとと ゆくけさるあるあさのたひ

みてとも見るれ

さるをそへしいるをえするそひくるとゆくくるうへとのくるをひく

とれりふや又ひ気さるあさを白くあきをえさらハうちのうとに似たるを

をらや さくしあされたふの下葉 一のうちみえ 一の

をたまれ 夏りれのおのく なそ気た れあさや 庭に刈あさ

をのるを刈し うしはるれあされ海そむし

○非麻 六十六 和名度利の阿志久佐

うたゝく草

○木賊 六十七

とくさかるそのはら山 きそうち又そのはらふ

よめり

○白朮 六十八

うけらの花 むさしのゝあるされてひらけぬ物やあはにひらけぬ

よしとよめり又又うりいてゝやとしもにあり又いし

井渓又あきり

海はなるをあけ をけら草 ひれ木をとらと云説あれとをけらやなとそりしと

三葉四葉とあるも木三葉四葉あるとゝのつく

ないにたる捨と云説をかるやうにまこゝまとちもしくとけらさかち苦の葉ありひ

三葉四葉とりしまうにみさし葉をうけ出之相捨然ゆくり

○羊蹄 六十九 和名に志比

いちしの花 見りしちと云りちま八雲政羨や又ある物にをいちて

を伊ちしの花となり伊ちしのきのいちしゑろとは

とよめり○いちしふあふうをあきみちれをのいちしの名

ゆるきけとも

○駒繋　七十

○あさなあさなかふつのくのこゝろをさそはれんくんや月をとめてし

○鞁菜　七十一

大海に近く移る 讃岐 此海 由よりてし 又近江のこ 近くらせ あつ山し蔦
うき旅にそつゝ
たくもやるり
し ところさまのさとれくあとし あそ山本
のあとし 出し く海し 里もちのし 河里乃し まつ ねよく

よあつさ○あつさ弓ひきのくつくらまつ井よわの思人にことのさけきん
此前の山やまもへ六思中のくせちいてきふたりとりふしてみつけくらさ哉
そてむちはきつさへくろつさとうけれつたておくふたひされとまつをも
ひとりおりひまきあひたれへられやうまつねなるふ人きひとうつまするわてを
りひうとするもさけうらん
とねうつるしそ

○射干　七十二

こ海乃つきし近くあさし

○よもきふさきくろをなれや庭の面にうつす扇のたてまつらん

○太子菜　七十三

○えのこ草とのうころく御よ出て秋まく谷のたきやとらうん

○白燕草　七十四　天門冬花

○たかふよあふ雲井の庭のすきひ草とりてもあくふうつ珠抱子

○白頭花　七十五

翁子草　老人よまくへよむ

○氷蓋　七十六

ぬまのてなれ　田中の井との花乃露こゝに　天

○なりしろのふちのあせのうへこ

うめく田あき

けれまくてふたねをとあやさ類れんあのた

此井とみこそ見 いつはのふかき色しばし田の
あぜにしばし しのぶれどさぬにすまで

○蒋草 七十七 三稜草せうく 宝九利世書

くれぬにすみかけくる いさつらにひかれし
浮く海江にうきめ さや海れ池によめり いさやまなる池の

こくりの根を見根とうちなく人のくるそまくあく又ゆしてもいやまの池のこともあり○みつくれにかりあさぬの見くりるの月日もくれとれんとなし○根とよしてうきよるきそもくちゆまいうらみくまとるのひきたる

○浅沙 七十八

○見れば又あさしれにてふ沼ゐもそこのむの根とそあつりね○打まふるうらふかくらぬうき根よりむあさしのさてそれひろく○池みなれにてふ草のあさしのこうえきありひとりかく袖うかな○み海さ見めずのあさしのうきてのことかはあるなるにわりのあうかな○思といへはあさくのぬ海の池な

うちきくとのこなるむつかな

○鏡草 七十九 くくと見ゆ河へ多草之まつきくの名にいふ草あり

○うくもとのそちまたひとみのとくさ春はへ月よりけみつきつて

○打発草 八十

○秋きぬと安つつ庭のれしき草はしとく露をとやすん海されん

○荒草 八十一

○浅ちとらかくや浅る此あさひ草 伊なりのぬまの打ひ
もそうちあさひひらりねさせよ
くさ

○千許草 八十二 万中に和草とうけつまいか草は菜色宅元こ海うつまりえこ根山うりきとあくあさと根とも立くあくやまとめ字やとえし文わつき草をつくまれるとあり

○あしのさのなかのよこくさはうやかうり秋と思ふ…ころか
○かしかしてうさかはれあしのよこくさのかこくとのといふもにあひさん
○海か世もあちこち秋まかりかこ
菜のはこころかはかつはのさそなれ　あしかゝりのはこねかし
わかこ草　かこ菜をはむやかくえ　河邊
此わこ草乃かゝり

○若菜　八十三
○あまたかそのやさ田のあせはころこれひて秋まつへくもあたかさらうか

○野老　八十四
○もの野老とろろもむかといふなかきにかさかぬるるまみくさうや君
○をれみちよろくみるとなかりかり世に飛世なへのためかれ

○下萌　八十五
○しもつけやまかきふましれあちはねのかひらふえれは登へこえハさけ

○山苣　八十六
○いもの女にわもつかまきと山ちさの花とは君かうつろひぬらん○いか
かりんめあふちしうつろくれまつ勢にまかる山ちさの花○年くおくつ
戸まよし山ちさのかく一枝ハうすひろうためる○あつ
もの陰れあぬ山の山ちさの花はさる夏あきえさやさし　あかうけて
さく　露をおりこふとくよめ里

○山女　八十七
○戸中されうつ戸まふあきをひらしらへてくるれらうつる大系の里

○土針　八十八
はりやせやらりおふはちかりめと伊色ゝ里

○母子草　八十九
○もものさくむもちもあはらふかうくかあたりと
ちくこはむ　巳ちねそ

○小ゝ妻 九十
○山かつのおもひてうつくしめしそ夜比せこゝろもとくしな祢○月清兄
あきの野ゆかりの白露にさしめふくろ衣さぬれぬ○ますみのまさし
むと涙かうきめうつりも袖もぬれなり

○馬束茸 九十一

のきつゝの花 又かうそりの花ともいふや此あさく比ゐ来とうく

○木芙蓉 九十二

きよもきの花 そもを木芙蓉にありもとふ流をあり醍醐にとうけうし○おきを
ものかひてをあひたし○おちのうつろひやときけりかも
とありひも庭前表を木蓮なといくりあく中華にのぞく陸若木の蹟曰唐
棣郎奥李也花色あるひをちろく六月花なる矣さらし奥李庭桜月花なら
も添ふりかひねけハをとうく木蓮けりへ花も桜を木蓮の花ありくとろ
しに梵中なりてハ花かゐうそてあ○くちれと論語なかりハ寄の下たらは
うま花のさかりをおもかへ法花ひくゆてまそむ時も花うをもえをそうとうう
をうりてもるかなくるをたとへもるや法ま実たりをうつろひやまちとうある
もは木芙蓉とうへしなりとうし○まさけてまれあかそけとも空の色うちふか
そらつろひまんかうつろふとふあれも月花も又きかと見えしなりされせ
又妹ようをうつろひやともとむつ花

○竹 九十三 付篠

河竹のよしむしいゆく
むらなとせむさいもむかふえいまいよしよりなかうき竹ともいふ花
しうゑしとらし
学 ゆやもしのしれ
ゆくちいろのしをく
うひしわすしものへしのしまのしとられ
しあきをしうらしゆくわくる袖ゆく枕ゆく
わりうく 又みく字なくても ゆくれ葉をゆくとあく涙みとさくうきしせ

の字あり ても 昔のしふ いそしわのむこし忠岑のしる海
しこしのもしら あさ篠原 本のまゝあしたを茶人を
あらぬ竹 いろ清くみえなるむつ こともむすひてつまいか をとめしせ
むかしの気分くの月くら 源氏 くれ竹のまさしと家
思ふ世まて逢 なる心ほひといふまゝ 源氏也雉兆薫 香楫の名なり
つけて白とのへり舟 まもいたしとあく 子文菜 たけの異名や 小枝菜 日ほ玉草 月○秋風 たまもく家
れ松をりかふまり河玉 菜もとたなといふへき発玉 夕玉菜 あきいたけ音とらくらし ○月よ見く
孫えとハ発玉 竹の御り孫 ゆふ玉くさのあき風よきもいつよう
むかしさえれし ものゝし 古と し
みさ枝 ゆくの葉のさやく 色を清らし 葉
うへ世そとしふるしれゝ気うち 篠むさい 去

清か石の山しくろめ 彰 六 文の色ぬ竹のむし
ちいろあるうけ 是非 や 竹のもし山 て ゆく生なり
されゝ竹 帝竹也 ゆゑある称く源氏
○箏 九十四
めかる玉 箏の異名や 瑟 玉うりあり しけの子とともよめるや ○今さらま 何れひつら
むたけのこのよ気かし たまのつるわのおもひからんれ 拾遺 見た
しけき世とん存しまや
うんさをきくれくさ身れ孫たのんぞ うえ称よ よあり
おふるたけのと 雪のそくなるたけのと
○和名わく 九十五
通京 あをひのころ 鳥以 旅宁
飛廬 宇波良又布 天文佐 天見冬 すまろ ろさ

黄精おほゑみ　甘草あまき　人参くさ、みこまけ　牛膝ゐのくつち
細辛美也万好奈支　柴胡の世利又のくさ　防風波万多うな　白蔦うしよもき又みちしる
むらさき　黄連かくまくさ　王不留行まくろくさ　黄芩ひゝらきさえ
茜根阿加袮　知母やまところ　栝樓からすうり　石龍芮都加紫数
石韋伊之の波宇知又伊波志波　獨活ふかわ　萆薢今度古呂也ところ　貫衆くさわら比又於仁和良比
和良比　羊桃以羅なくさ　前胡うたな又のせり　芎藭於年子かつら
大黄ひちくさ又くろくさ　玄参おしくさ　苦参くらら又ましくさ　牡蘭よかくさ
澤漆とうひとさ　射干からすあふき　蛇床うまくさ又あひくさ　烏芋くわい
貝母はゝくり　鼠尾草巻曽波久　茺蔚めはじき　酢漿かたはみ
蜀漆久万宇都木　蕳茹にひさ　蒜子こひる　葫子おほひる

景天いきくさ　風帯みつうつほ　蓍實めとき
漏蘆ありくさ　敗醬おほとち但是は木也　地膚子にはくさ
雚菌くさひら　藕實はす須　芽子つるかね
干薑はしかみ　雞頭實とりさか　菟絲子ねなしかつら
千歳虆汁あまつら　蓋草かりやす　六芝青赤黄白黒紫芝のたけ
王瓜からすうり又のつら　決明えびすくさ　女萎ゑみくさ
藿香子くれのおも　秦膠はたつもり　蘪蕪さしくさ
王孫ぬはりくさ　百部根ほとつら　薺苨ぬえくさ　積雪草つほくさ
防己つゝらふち　鹿藿くすかつら　蛇莓へびいちこ
狼跋子ねこのしたえ　弓弩弦おほゆみのつる　白薇ひかつら
酢醬草かたはみ　莨菪はしりところ　車前おほはこ　天名精やふたはこ
草蒿きつねあさき　馬先蒿母子草　由跋からすつりくさ　羊蹄しの根

手扁 さうさち 草 馬韮 あさこけ 菌実 ちひ 牽牛子 あさかほ

皂角 佐伊ケ伊之 地楡 のつち又たひをの枕 忍冬 すひかつら

仙女菜 つふくさ 虎杖根 いたとりのね 老母草 をと

覆盆子 いちこ 継子草 ひつせり 如意草 ゆきくさ

葦薇 ちうろうのを 常思草 すのえ

藻塩草巻第八終

国立公文書館
National Archives of Japan